



X 複写

国立国会
51.10.1
図書館



始





X

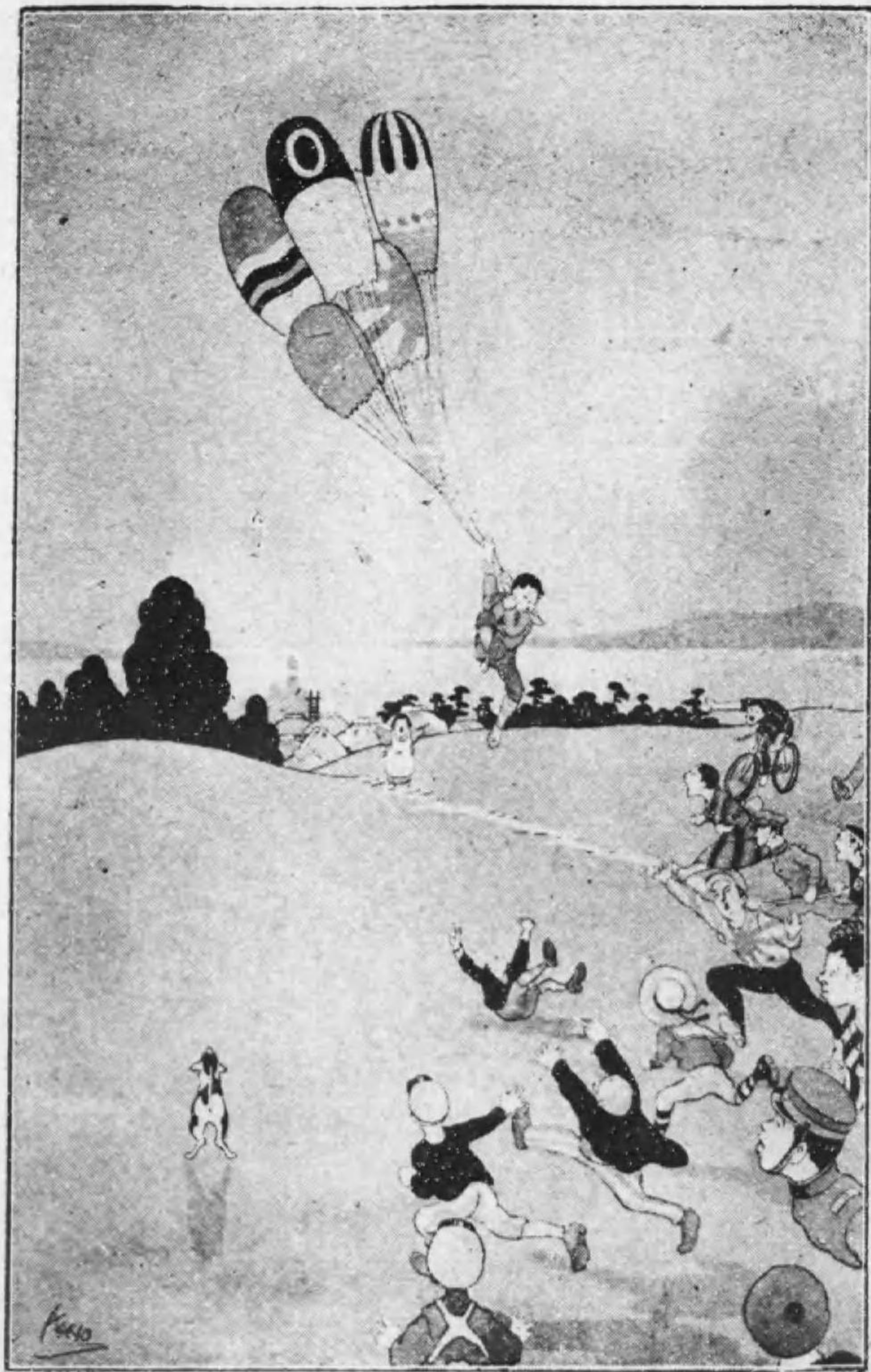
国立国会

51.10.1

図書館

特 109
302

ニ
コ
く
一口
嚼



ニコく一口噺

○兎の名作

大層雪の降つた寒い朝、次郎さんお庭へ出ると、美事に雪で、兎が造りあげてありました、如何にもよく出来て居りますので、次郎さんあゝ寒からふと言つて、炬燵の中へ入れまして、時過ぎて蒲團をあげて見ると、兎は影も形もなくあたりはグチャヨクになつて居たので、

「オヤ兎がおしつこして逃げて終つた」

○方圓の器ほうえん うつは

田舎漢が上野公園にお花見にでかけ、开處よ此方よと見物いたして居る中ツイ歸る方角を忘れ、怎うしても道が知れなくなつて了つたので、腰掛茶屋へ這入つて、

「モシ／＼私の行く處は孰つちでせふ」

と問ねますると、开處のおかみさんは、突然一本の團扇を出し目の前へつけ、

「爰は公園だよ、これを見あてゝ行きなさい」

「ソリヤ又怎う云ふ譯で」

「道は公園の團扇に従ふ（水は方圓の器に従ふ）と云ひますよ」

○鶴つる

龜かめ

無性で怠け好で働のない、ある職人のおかみさん半泣の聲を出しながら、

「子ーお前さん、此不景氣だつてえのに、お酒斗り飲んで居られちや困りますよ、寒い／＼と思てる中には直ぐ暑くなりますからね、今年は是非一張蚊帳を買つて貰はなきやなりませんよー」

「何だ篋亂めえ今から爾なことを言つて、先の蚊帳があるだらふ」
 「有つたつて破けて了ひました」
 「それは結構……有難え〜」
 「怎うして、蚊帳が破れて有難いのです」
 「つると蚊めが（鶴と龜）が舞込むからさ……」

○似非亡者

不景氣ついで如何にも恚にもやり繰のつけ様がなくなつた熊さん
 頻りに懊鬱こんで腕拱をして居たのが生涯たゞの一度と云ふ智恵を

絞りだし、

「ヤイ〜嬢……棺桶を買つて来い」

「何だつて、縁起でもないそんな事を言ふのさ、和郎さん氣でも觸れたのかね」

「莫迦を吐せ、唐で孔明日本で楠正成も开處のけつてえ計畧があるんた、何でも好から、早く棺桶を買つて来い」

と吩咐しますので、おかみさんは仕方なく大一番の棺桶を買つて來ると熊さん、其中へヌツクと斗り這入こんで」

「早く大屋のデコボコを始め近所近壁友達一同へ、乃公が死んだつ

て觸を廻して來るんだ、了解つたか」

「ア、やつと、了解つたよ」

似た者夫婦とは能く言つた譬へで此おかみさんも頗る呑氣屋さん
見えまして、方々へ熊公が死亡たと解れ歩むたから流石に打棄て、
置ぬのが人情、大屋の禿頭を眞先に米屋酒屋儲ては炭屋八百屋に至
るまで、ゾロ／＼とやつて來ましたので、おかみさん、空涙を流し
ながら、

「皆さん怎うも誠に……何とも申譯がムいませんがモウ少々お待
ち下さいませ、何しろ良人が、俄に亡なりましたのだ」

「イヤモ一其御心配は要りません、實は家賃は五月も溜つては居る
が、何しろ仕方がない」

と大屋が口を切れば、米屋の御大糠だらけの手を懷中へ突込んで一
圓札一枚取り出して、

「大屋さんも爾でせふが、私も丁度十圓足らずも貸があります、
何しろ稼人に亡なられて見りやお氣の毒のことだ、是は眞の少々で
すが、香奠のお記しにさします」

と件の一同を、おかみさんの膝頭のあたりへ突き出しましたが、豈
夫ヲイソレとは直ぐは受取れないので、

「イヘモ一、戴いたも同様で、貴君にはゑらいお借りがありますから、切望マアそれだけは……」

「マアそれはそれだ、何しろお困りの中らしい、兎に角お納を願ひます」

「それでは餘り冥利が悪ふムいます」

とおかみさん頻りに心にもない辭退をいたして居ると棺の中で、熊さん耐らなくなつたと見え、大きな聲で、

「冥利がいゝから、とつて置け〜」

○按摩の灯

「按摩上下八百文と……小僧按摩が流して歩ゐて居りますが、不思議や、提灯を點けて居りましたので」

「オイ按摩、和郎は目明きか」

「否え、皆もく見えません」

「それじや提灯つけるには及ぶまい」

「でも人が突き當りませんから」

と一本きめこんでスター〜二三〜行くと、ドシン——と強く此按

摩まにつきあつた者ものがあつたので、按摩あんまは大層立腹たいそうりつぷくいたし、

「此提灯このてうちんが見えないのか……」

「何だ篋棒べらぼうめ、提灯てうちんは消えて居まらア」

○香かうの物もの

あるお寺てらから、香かうの物ものを貰もらつて喰たべると、非常ひじやうに美味おいしいので或人あるひとに、

「寺てらでは怎どうして漬つけるのでせふ」と問たづねますと、

「それは非常ひじやうに長ながく漬つけるからです、此間漬このあひだゐて居をる處ところを見みましたら

重かさしの石いしに年號ねんごうが彫ぼつてありました

「へエー、何年頃いつころと」

「天明元年てんめいげん二月没ごわつはつすと彫ぼつてありました

○癖くせ

或あるハイカラの若紳士わかしんしが怎どうも、他人たにんの所持品しよてひんを見みると、何なんとか彼かんかと言いつて遠慮えんりよなく價ねを評ふかたくなると云いふ、誠まことに悪わるい癖くせがあります一日あるひのこと友人いうじんの新調しんてうの外ぐわい套とうを見みると、例れいの癖くせがムラ／＼と生おこつて「オイ君きみ、君きみの外ぐわい套とうは五十圓えんもしたか」

とやつた、其友人は、懇ろに其癖の悪いことを諭し以來止めると注
告してやりまするのを、泌々と感じた見え」
「ア、有難い、友人なりやこそ忠告して呉れる、倘もこれを價に積
れば、千金の價値ありだ」

○福の神

「ヤイ〜貧乏神何處へ行んだ」
と平素極く口の悪い奴が、友達を揶揄しましたので、
「今貴様の家へ行くのだ」

「エ、縁起の悪い……畜生奴」
と口叱言を言ひながら二三丁程行くと、自分よりモット口の悪い奴
に出會つたので今度は、お世辭を遣ふ意志で、
「福の神何處から来た」
「今貴様の宅から出て来たのだ」

○柚子二つ

或家へ訪れて来た初対面のお客様の前へ此家の娘が、
「お茶を召し上りませ」

と差出しまする顔を見ると、二目と見られない大菊石なので、潑と思つて居る處へ、妹娘がお菓子運んで來ました、其顔を見るとこれも猶且大ヂヤンコなので、

「ハテ借て似たとは疎か………柚子二つでいらつしやいます」

○獨 樂

「君大層馬が好きであつたのに、此頃は薩張乗らんね」

「實は何う云ふ譯か、此節僕が馬に乗れば、屹度馬奴クルく廻りやがつて、目が廻つて來るので止めた」

「それじや君は、繋いであつた馬の紐を引たらふ」

「それは曳さ」

「そんなら當然、馬の事を駒と云ふもの」

○晝 と 夜

「お起なさいよ、屁五作さん、モー夜曉になつたからさ」

と呼び起して居りますのは敵娼の、てこ鶴花魁、幾干揺り起しても起ないので、少々自烈こみましたとみえ、唐突屁五作の獅々鼻を摘んで捻つたから、流石の寢坊も目を醒し、大欠伸をしながら鼻から

提灯をブラリ、

「ムニヤ〜」

「何うしたんだね、早く歸らないと、家の首尾が悪いと云ふのじやないかね」

「ハ、有難てえ、案じてくらつしやるは嬉しいけど、吉原さ明るくなつちや、乃公アハア歸られねへだ」

「オヤ、如何して」

「如何してつて、和女さ、今頃さ宅へ歸つて見つさせえ、夕飯さ喰べて燈を點けたんべ、これかう五里もある乃公が許へ歸る時分には

宅はピツタリ戸締して皆なが寝て居るだア」

「可怪な事を言ふ人だよ、未だ寢恍けて居るんだね、異國へでも行つたら知らないが、何で夜曉に夕飯を喰べたり燈を灯ける人があるもんかね」

「お前様知らねえから爾な笑ふだが、吉原が明るくなれば家が暗チユウ事を知んねえな」

○坊主

「文明國の戦争には、必ず何處の國でも、從軍の坊さんがあると云

ふ事だが眞個か」

「眞個ともく、日露戦争の時なぞも随分、從軍布教師が行たよ」

「爾すると眞誠の話だ、旅順の戦ひの時なんか、雨霞と飛んで来る弾丸の中を、坊さん達は大手を振つて歩めて居たが、一人も傷を受けたり死んだものはなかつたと云ふ話だが、坊さんには弾丸が命中ないのか知らん」

「坊さんだつて、命中らんと云ふ筈はないが、傷などは受ないね」

「可憐いね弾丸はあたつたら傷もつくだらうし死にもするだらふ」

「それには理由ありだ、坊主に毛がないじやないか」

○胸算用

「時に君は博識と云ふ事だから少々伺ひたい事があるんだがね……」

「何だね、天下の事僕の知らざる事なしだ」

「そりや有難い、實は僕の愚妻が、近々ヲギヤアと来るんだが、何しろ初産の事だから心配だ、何か安々と産む良い法はあるまいか」

「あるよ、最も易いこと、容易なり易だ」

「如何するすだね」

「姪婦に精々と胸勘定をさせるのだ」

「へエー何うして、それだ産に利のたえ」

「胸勘定を度々、やれば暗算は上手にならア」

○悪

銭

ある家の坊ちやんで至つて、粗忽かしい物持の悪い、金ちやんと云ふ子がありました、何本扇を買つてやりましても直ぐ落したり紛失したり致して、今日も今日とて阿母さんを再た強請りますので、

「和郎にも困るね、今年になつて何本買つて上たか知れないよそれに、廉いのは違つて皆な良い扇子ばかりだよ」

「嘘言だい、アンナ物、書も字もかいてない扇だ、何が良いんだい」

「書や字の怒じつか書てない、白扇の方が良いだよ」

「だから乃公アが持つて居られないんだ」

「何故……」

「白扇（悪銭）身につかずだとさ」

○あら 糞に

美味おいしいのと器うつはの上好いので大層評判たいそうひやうはんのよい、浮世亭うきよていの主人しゆじんは殊ことの外落語ほかはこし家最負かひみきで、常日頃目つねひころめを掛かけてやる柳家春風やなぎやうしゆんぷうが一日遊いちひあそびにまゐりましたので、

「オイ師匠しやう、今日けふは久し振ひさぶりで來たんだから、何か御馳走ごちそうをしてやらふか」

「へ、これは何うも、結構けつこうなこつて……」

と、コツ／＼頭あたまを低ひげ、空世辭そらせを喋舌しゃべりたて、頻しきりに喜よろこんで居をりま

する心こころの中うちでは、何なにしろ名代なだいの浮世亭うきよていの主人しゆじんが自分じぶんから御馳走ごちそうをしやふと言いふのだ、孰いじれ振ふるつた珍ちんなお料理れうりが出るだらふと思おもつて居かたのでしたが、

「サア、澤山たくさん喰たべな」

と差出さしたしたお料理れうりつてえのを見みると、大井おほどんぶりの中なかに山盛やまもり入れてあるのは魚さかなの骨ほねや頭あたまばかり、宛まるでニヤンてきのかワン公こうより外喰ほかたべられ想さうもないので、落語家しかせんせいの春風しゆんぷうは愕おどろいたの驚おどろかないのと云いつて、目めを圓まるくいたし、

「親方おやかた——これが御馳走ごちそうでげすか、コリヤ荒煮あらいですわ」

「ソーよ、落語家は浮世のあら（缺點）で飯をくふものじやねえか」

○教訓琴

ある處に、男女二人の兄妹がりましたが、妹さんは莫迦氣て琴が好で、朝ムツクリ起ると、夜るが夜中でも、たい飯を喰ふ時と寝て居る間だけ休んで跡はノベツに、コロリンチャンとやらかして居るので、兄さんが、これでは好かぬと思ひ」

「ライ妹、和女の様子に書籍も讀まず、針仕事もしないで、朝から晩まで、琴ばつかり弾て居ちや困るじやないか、今度琴を弾くと、私

は相當の處分をするからよ……」

と念を押して琴を弾くことを止めましたが、何が儲て好める事として妹さん、少も兄の言ふことを諾ませず、やはり兄の不在の時は、コロリンくつとやつて居ると、兄さんはこれを見つけ、六層立腹をいたし、鉞を持って来て、突然、琴を眞二つにいたしたので、妹は、

「何だつて、こんな事をするの」

「前から貴様に琴破つて置いた筈だ」

○木魚

酒屋へ三里豆腐屋へは一里半と云ふ、極の邊僻な片田舎花崎村に、萬歳山才藏寺と云ふ、昔は由緒ある名刹がありました。が、今はモ一残れると云ふは名計りで、山門は十年前の大暴雨で、打倒れて跡方もなく、本堂とて棟は傾むき屋根は腐朽れ、壁は小さな犬などは、自由自在に出入ができる穴が二つ三つではない、寝ながら月見ができません程の荒寺、元より疊なんぞは表なんぞは摺り切れ、真計りになつたボロく、爾かと云つて、無住の山寺ではない、チャンと定住の大和尚は奇天法師となん呼ぶ、徳の高きこと屋根位には届くべく、慈悲の深いことは、裏の墓場にある穴ほどはあらんずらんと云

ふ御方で、其他は一山こそつて、小坊主と權助の二人合せて三人と云ふ、偕て或時、此お寺で村の某が、大法要を營んだ事がありました。が、流石の大和尚も餘り寺が不潔しいので、少しは恥らつたと見え、テレ隠しの早速の機轉にやつ、けた即吟、

我庵は蚤か虱に灰ほこり

よう蛆わくと人は言ふなり

これで一時の處は、どうにかお茶をにぎして村人を歸しましたが、其後は、此噂がバツト村中にひろがつて、誰云ふとなく、何んな要事があつても墓々しいや、位牌決してアノ寺へは湯灌ワイ

……と、バツタリ葬式なぞを持こむ人がなくなりましたが、久しぶりで隣村からお葬式が明日來るとの報せがあつたので、奇天和尙は小坊主を呼んで、

「コレよ小坊主、明日葬式があるんだが、木魚はあるだらふな」

「和尙さん、五六日前屑屋へ賣つて了ひましたから有ません、何うしませぬ」

「ソレぢや、山向ふの道樂山野良倉寺へ行つて、本魚を借りて來い其序に質屋へ寄つて衣を受けて來い」

と伝咐ましたので、小坊主は急いで、寺を飛出し先方のお寺から、

木魚を借りてまゐり、途中まで來ると、質屋へよるのを忘れた事を思ひ出したので、木魚を道のべの馬小舎の前へ置いて、質屋をさして駈出して行き、やがて用を達して再び舊の位置へ戻つて見ると、不思議や木魚の影も形もないので、吃驚いたし、此事を奇天和尙に話しますと、

「それじや、木魚は馬に喰はれちまつた」

「エ、何で、木魚を馬が喰ふものですか」

「よくきけ、道のべの木魚（木槿）は馬に喰はれけりと云ふ芭蕉翁の名句があるからよ」

○おびんづる

一人の可愛らしい十六七の新造娘が、拍手をうつと、頻りに、何事をか、神か佛か知りませぬが眞赤に塗つてある木像に對つて、祈りをあげて居りますのを、或人が、小影に忍んで聞かすと、一日も早く良い御主人のみつかる様、奉公口のあります様との少々風の變つた神頼みなので、其人は深切にも、それでは幸ひ、自分の友達で古谷と云ふ、極く深切な優さしい人があるから、开處の仲働に世話をしてやらふと言ひますと、其娘も大層喜び、何分頼むと云ふので

早速、古谷の家へ周旋をいたしてやりましたが、翌る朝、其娘は、顔の色を變えて、古谷の家を逃げて來ましたから、何うして逃げて來たと問ますと、娘は震へ聲のさも口惜そうに、
「アノ旦那は年にも恥ぢないで、妾と一緒に寝ろと申ますので、餘り腹が立ちますから、不都合じゃありませんかと嗜めてやると、古谷さんは平氣で、おまへは、乃公の許のおさすり傭ひに來たのじや妾に傭つたんだと言ひますから、爾な筈はありませんと、辛つとの事で、逃げて來ました」
との事に、周旋人も不思議に思ひ、古谷さんに限つてそんな人では

ないと、種々考へた末、漸く思ひあたつたことがあるとみえ、ボンと一つ膝を叩いて、

「了解た、ねえさん、和女のお願ひ申たのは、アリヤおびんずる様だからよ、おさすりは當然だ」

○博無阿彌陀

ある乞食坊主がある家の門邊にイミ、

「南無阿彌陀くく」

と頻りに誦念はいたしますが、幾干耳をひつたてゝも、跡の文句が

聞こへませんので、不思議に思ひ、

「オイく坊さん、何故おまへさんは、南無阿彌陀と云つて、跡を言はねえのは何う云ふ譯か」

「さればさ、倘しお布施を下さらぬ時の要心さ」

「何故」

「其時になつて、ぶつ〜(佛々)言ふ意志さ」

○小夜衣

「コリヤ愕いた……豪い御馳走でげすな、見渡せば唐饅頭、蕎麥

饅頭、いまさか、羊羹、鹿の子餅、鶏卵卷、いろく甘い物づくし
 是じや何んな下戸でも、グーツと溜飲が見た斗でも生り想でげすな
 併し、君が一番、此中で大好物は何だえ」

「左様さ、何も彼もドレもコレも皆な美味そうだが、一番甘めへの
 は石衣だらふよ」

「何故だえ」

「古歌にもあるじやねえか」

さなきだに、旨さ(重さ)が上の石衣。

○暑さを忘れ

「オイ太郎君……君は此寒いのに袷一枚でよく凌げるね」

「凌げるとも、これでも未だ暖か過る位だが豈夫、單衣も着て居ら
 れないからね」

「豪いな、併し冬強い人は夏弱いと云ふが、君なんか夏は何だえ」

「イヤハヤ……夏季となつちや、カラ片なしよ、今つから来る夏
 が思ひ悩むで居るのよ、何とか夏敗のしねえ様に暑さを忘れる工夫
 ばあるまいか」

「あるともさ、君真個に暑さを忘れたいのかえ」

「真個ともく、少々位のお禮はするよ」

「よし来たッ」

と突然太郎に飛ついた次郎は、三尺帯をクル〜と手早く、太郎の咽喉もとへ巻つけグイ〜締めつけますので太郎は苦さに耐かねへ
 「荷しい〜、君は何の恨みがあるんだか知らんが、殺すのは酷いよ」

「恨みはないが、君に頼まれて、無據ないからさ」

「莫迦な事を、何でこんな事をしてくれた、僕が頼む筈はないよ」

「でも君は、暑さを忘れたいと頼んだらふ」

「ソリヤ頼んだよ」

「だから遣るのだ」

「如何して、何う云ふ譯で」

「咽喉もとしめれば暑さを忘れると云ふせ」

○原稿

ある書肆の小僧が、先生方が澤山来て、小説やら何やかあの、原稿を主人に賣つて、澤山のお金を受取つて行のを見て、欽やましくなり

主人しゅじんの用ようも何なにもしないで、夢中むちゆうになつて、譯わけのわからないクダラナイ事をこと、毎日まいにちく書かいては、妙めうな顔かほをして思案しあんに耽ふけつて居ゐるので、主人しゅじんは、

「コレ小僧こぞう毎日まいにちく用ようもしないで何なにをして居ゐるんだ」

「へい、アノ私わたしは、原稿げんかうを認しためて貴君あなたに賣うるつもりです」

「何を生意氣なまいきな事ことを言いふのだ」

と言いひながら、頭あたまをポカリ、

「アツア痛いた……コレで辛やつと拳固けんこ（原稿げんかう）になつた、

○女の虫賣をんなのむしうり

「モシ源助げんすけさんおまへ許とこの、おかみさんは此頃このころ兩國にがはの露店ろみせへ虫賣むしうりに出でなさる想さうだが、少しは賣うれますかかな」

「イヤコレハ裏うらの漢學かんがくの先生せんせいでしたね、お影様かげさまで可成かなり賣うれます」

「フンそれじゃ、澤山たくさん儲もうかるだらふ」

「それが不思議ふしぎで、些度ちとも利益りえきがムいませんで、實じつは今いまも今いまとて家内かないに叱言こいごとを言いつて居ゐりました處ところで、一體たいど何なにうしたつてんでせふ」

「何なにうも恚いかうもない、ソリヤ當然たうぜんの決果けつぐわ、寧ろ到底たうてい就中じゆうちゆうだ、女をんなに申ま

を賣らして好と思ふのが間違つてる」

「へエー、それじゃ先生、女は虫を賣るのは不可ないのですか」

「不可さ……古諺に、女賢しふして虫賣そこなふ（牛賣損ふ）」

○逆 剃

僕が先達て或る寺の前を通りかゝると、本堂の方で、狐鼠く〜と話
聲がするので、不圖覗て見れば、アラ不思議く〜、本堂正面に安置
してある、釋迦如來が机の上に突立ち上つて、傍に居る、阿彌陀如
來に對ひ、

「阿彌陀、今日はお前の頭を剃つてやらうか」

「ハイそれではお釋迦様、誠に濟みませんが、お願い致しませふ」
と頼みましたので、釋迦は剃刀を持つて、阿彌陀の背後に廻りゴリ
く〜ゴリく〜剃りかけますると、

「アツ、ア、痛く〜、目から阿彌陀が漏ぼれらア、何うして恁麼に
痛えのだらふ」

「當りまへよ、釋迦（逆）剃だ」

○盲人の觀劇

瘤市さんと云ふ按摩さん、大の芝居好きで、大抵の劇場へ盲目のくせにかゝさず見物にゆきます、曩日も歌舞伎へ出かけたと云ふので或人が、

「モシ〜瘤市さん、このあいだ、木挽町へ見物に行かれた想だが狂言は何をやつて居たのか」

「一番目が二十三孝さ」

「エツ何を言つてるのだ、二十三孝なんて芝居があるものか、そりや二十四孝だ」

「でも乃公には、一孝（一向）見えねえもの」

○曾我櫻

ある植木屋へ、半可通の若旦那が駄洒落たら〜這入つてまゐりまして、

「オイ植木屋、おめへの許に、伊豆の曾我櫻はねえかえ」

「へエ、若旦那……丁度好鹽梅に、極上等無類飛切テケレツのバアと云ふのがムいます」

「爾かソリヤ好かつた、併し代は幾干だ」

「ハイ〜、大勉強ギリ〜決着のお價段が、十郎です」

「チト、高いな、五郎にまけな」

「何う仕りました、お安いので、なか／＼敗りません」

「工藤／＼言すと敗て了ひな」

「お安いんですから、何卒爾仰やらずにお買ひ下さい」

「ソーカ、それぢや河津に行くよ」

○落 穴

道路普請がはじまつたので、往來は諸々方々穴だらけになつて居るので、威勢よく駈けて來た、一輛の人力車、何うした途端か、片輪

が穴凹へかゝつたから、たまらない、アレよと言ふ間もあらばこそ横ざまに倒れた、め乗つて居たのは、二十一二の仇つばい粹な藝者でした、可哀想に、ズンデンコロリと、穴の中へ落つて了ひましたのに、車夫は、其傍に儂乎突立て引あげてやらふとも致しませぬので、駈付てまゐりました、人々は口々に、

「ヤイ車夫、何故其藝妓を打棄つて置んだ」

「車夫の力では、だめです」

「何故」

「藝妓などは、到底あげられません」

○三味の皮

昔から犬と猫は敵同士と相場は決定て居りますのに、コレ又不思議に、仲の好い、犬と猫がありました、平素此猫と犬は、鴛鴦の如に離れた事はありません、一時、互ひに嬉々と云つて巫山戯て居りましたが、何を思つたか犬は猫に對つて、

「オイ〜猫ちゃん」

「ニヤンダイ」

「おまへは今日は恁うして元氣よく遊んでは居るが寒いと直ぐ火鉢

の上に乗つかつて寝てばかり居るじやねえか勿體ねへからモーこれからは止めなせへ」

「だつて私は、寝子だもの仕方がないワ」

「そんな口の減らねえ事を言ふと、今に罰があたるせ」

「それは覺悟の前だよ、けれど生て居りや大丈夫だよ」

「何故」

「三味の皮になるまでは、罰（撥）のあたる氣遣ひはないよ」

○心

中

臙夜に人目をつゝむ、頬冠り死出の旅路の踏はじめ、衣裳の對の裾模様、雨持つ東風に送られて、辿り／＼て來かゝるは花に名高き隅田堤と淨瑠璃があつて、

二人の若い男女の駈落者が、豫ねて覺悟はしながらも、何とはなしに、此世の名残が惜まれて、互ひに犇と斗りに、抱き合ひ抱きしめ返へらの愚痴にむせ返つて居ると、だしぬけに背後からヌツクと、立現れたは、お定りの雲突くばかりの大男、

「ヤイ若いの、宵から爰で網を張つて待つとも知らず、のつそり爰へ來て呉れた、おぬし等二人、言すと知れた、駈落者懷中には定の

て、たんまりとした路用の金があたらふ、四の五の吐さず、残らふ爰へ出せば可しさなくば、身の爲めにならねえぞ」と脅迫かけれど、さのみに愕く氣色もなく、

「否ハやお氣の毒な、生憎、二人ともに持合せのお金といったら、白銅一つもない身の上、其代り、さほどに金が御入用なら、只今、直ぐと此場で、二人の身體を金にして御覽に入れます」

「フン、ナニ身體を金にする」

「二人がたゞ今、川の中へ飛こみますと、情死になります」

○産死

或時一人の老母が村役場へまわりまして、一通の届書を差出しますと、役場の書記は其届書を一ト目見て、

「コリヤ死亡届だなア」

「ハイ」

「死亡者の年が書いてないが、幾歳だ」

「私の娘で、二十八才でムいます」

「違ふぞ、診断書には産で死んだ様に書いてあるが」

「へい産で死んだのには違ひありませんが、年は二十八です」

「莫迦を言へ、二十八になるものか、十二だらふ」

「なんで十二や十三で、産をするものはありません」

「ナニ爾でない、産死十二と云ふぞ」

○胃の薬

「オイ、君、胃の薬には何が一番良だらふね」

「左様さ、まづ飴に限るね」

「飴………何んな飴、誰の發明した何と云ふ薬飴だえ」

「ナンノ薬飴くすりあめなんかじやない、駄菓子屋だかしやで賣うつて居ゐる子供こどものしやぶる、十本ほんで一錢位せんぐらゐの飴あめを、毎日まいにち一飯いひの代かりに腹はら一杯いっぱい喰くへば屹度きつと、全治ぜんぢするせ」

「馬鹿ばかくしい冗談じやうだん言いつちや不可いねえ、そんな真似まねをすりや、猶々なほ酷ひどくなるせ」

「ナニ大丈夫だいぢやうぶだ、屹度きつと胃いは固かたまるから癒なほる」

「何どうして」

「でも、飴喰あめくつて胃固いると云いふからよ」

○豆 腐

「お竹たけや、お竹たけ……」

「ハイ、お内儀かみさん何御用なにごようで」

「アノお前御苦勞まへごくろうだがね、今戸外いまがらへ豆腐屋とうふやさんが來きたらしかつたがツイ呼よんで貰もらひ損きなつたから横丁よこてうの豆腐屋とうふやへ行いつて、一挺買てうかつて來きてお呉くれな」

「ハイ畏かしこまりました」

と下婢げぢよのお鍋なべは、味噌漉みそこし箆ざるを提もげて、勝手口かたてぐちから飛出とびだして行いつたぎ

り一時間過ぎてても二時間経つても戻つてまゐりませんので、お内儀さんは烈火の様になつて憤りだした處へ、瓢つくりと戻つて來たので、叱言を言ふと、

「遅くなるのは仕方がないので、買ひ物が買物じやありませんか
考えて御覽なさい」

「何故だえ」

「買物が豆腐ですよ」

○後

悔

號外々々……大變な號外……チリン……

と章駄天走に飛ぶが如く、腰にブラ下げた鈴の音勇ましく、駈て來る、號外賣を呼びとめた、一人の老人、

「號外屋……」

「へい……差上りますか」

「號外を購ふのではない」

「それじや何でお呼びなすつた」

「何故人の前をズン……通るのだ」

「それは無理だ、號外を賣に歩ゐて居るんですもの、愚圖……しち

や居られませんか」

「貴様は號外屋だから不可んのじや」

「何故です」

「號外は先にたゝすだ」

○歸り車

「へいまゐりませふ、御都合まで、歸り車ですから、お安く行まふ」

と一人の穢らしい朦朧車夫が、客人に勧めますと、

「ソーカ、折角だ、それじや乗つてやらふが、兩國まで幾干だ」

「へ、口開けでげす、二十錢頂戴致します」

「可憐いな、今和郎、歸り車と言つたじやねえか」

「へ、口あけの歸り車で……」

「何だか變だナ、マア可や、乗つてやらふ」

と腰を据えると、ブンと異なる匂ひのする膝掛を前へ掛けられたので何となく身體中が棘としたので

「オイ車夫、大分穢ならしいが、随分古物だナ——」

「へい、何に、大して古くもありません、十四五年前、柳原の堤

で買ったんで」

「コレは愕いた、併し虱だけは居るめへな」

「へい〜モ、それには居ない頃です」

「オヤ、それには居ねへつて、何處かに居るのか」

「大概、旦那のお膝の暖か味で、お着物へ、虱は宿替へを致した時分です」

「嫌だせ〜、薄氣味の悪い、卸して呉んな」

「却々下しませんな」

「ライ〜賃銭は拂ふからよ、アレ危険へ〜、そんなにスタ〜」

矢鱈に駈けちや、電車か自働車にでも、衝突ると俵は粉末微塵だせし

「ナ〜ニ車は幾干壊れたつて、私のじやありません、損料車ですから、構ひませんや」

「車は構はねへとしても、コレじや人間が危険ねへアレ〜危険へアツト、言ねへこつちやねえ、ソレ見ねへ、何だつて車を顛覆へし

て了ふのだ、ライ痛へ」

「だつてこれが、最初のお約束ですもの」

「そんな約束をするものか」

「だつて、旦那、かへり車と念が押しあります」

○平知盛

二三人の芝居好の友達が集つて、古今英雄豪傑の月旦をはじめると
一人の男が、

「僕は、平知盛を第一に推すね」

「何故だえ」

「何故つて、彼は平家没落の後までも、渡海屋銀平と名を變へ人目を晦まして、密かに平家の恢復を計つた男だが、惜い哉、義經に見顯されて、潔よく、大碇をさし揚げたなり、海中へ洵然と斗り這入

る處なぞは、實に勇ましいね」

「幾干勇ましくつても、彼は馬鹿で、第一圖迂くしいから、乃公は嫌ひだ」

「何うして君は、馬鹿だの圖迂くしいと云ふのだ」

「馬鹿さ……圖迂くしいや、幾干銀平と化けても、元は、新中納言じやないか」

○立關番

内股幸譯さんと云ふ天下の名醫がありました、一晩の事急病人があ

ると云ふので、先生をお迎ひに來ましたが、生憎先生も不在なり、代診の先生も居らぬ處から、一時間に合せと云ふので、玄關番の書生さんが、代診に化けて、車に乗り込んで、駈けつけましたら、雨が降つて來たので、スツカリ幌をかけてあつたゝめ、中でグウ〜寝て了ひました偖て、その中、腕車は、病家の門前まで到着しましたから、車夫は轆棒を地へ下ろし、

「頼まふ〜」

と大きな聲を出したので、代診の玄關番先生吃驚いたして目を醒し寢恍け聲で、幌の中から、

「ド〜レ」

○柿 盗 人

或る農家の庭に、澤山美味そふな柿が實るので、近所の若者達が、ある晩三人伴れでそれを盗みにまゐりまして、樹登りを致し、懐中や袂へ、思ふ存分に、挟いでは入れ、千切つては押こんで、サアこれだけ盗れば充分と、逃げにかゝりますと、跡に残つた一人の男が「待つて呉れ〜」

「何だ〜」

「落たく」

「落ても宜じやねへか、柿の一つや二つは何うでもいゝ捕りでもする」と大變だ、早く降りて来いや」

「ナーニ柿じやねえ、乃公がお落たんだア——」

○賣ト者

真面目腐つた顔をした、一人の大道易者の前に、大勢の子供が尻を揚げて遊んで居りますと、賣ト者は、

「店の邪魔になるから、モー少し向へ行つて遊びな」

「何を言やがるんでえ、へつばこ賣ト者奴ツ」

と子供のことだから遠慮なく、悪口を叩いたので、火の様に怒つて

「ヤイ全體手前邊は、何處の子だ」

「おちさん、當てゝごらん」

○禁厭

長座のお客を早く歸す、おまじなひを教はつて来た主人公、折しも平素来ると、一日一晩づゝ通しと云ふ歸る事を忘れて了ふ、長井さんと云ふお客が、訪ねて来ましたので、早速教へて貰つて来た、禁

厭かひをやらかして見みやふと、密まつとおさんどんの、お鍋なべに、耳打みづうちをいた
 しましたので、長井ながいさんは定さだめて、何なにか御馳走ごちそうでも誂あつらへるため下女げせう
 に密まつと吻咄いづつるのかと思おもつて、

「何どうか、お構かまひなさらず、お構かまひ下くだすつちや、緩然ゆるりお話はなしも出来でき
 せんで……」

「ナニニ少すこしもお構かまひは致いたしません、鍋なべや早はやくしなよ、下女げせうの鍋なべは
 早速さつそく臺所だいどころへ這入はいつて、高たか箒はうきに、手拭てぬぐひで頬冠ほのかりをさせましたが、何なに分ぶん
 山出やまだしの女をんなの事故じこ、自じ分ぶんでこれ好いのか悪わるいのか、了わ解かないため、
 ソレを持もつて、主しゅ人じんと長井ながいさんの話はなしをして居ゐる處ところへ、突つ出きだして、

「長座ながざのまじなひは、これで好いのかね……」

○池いけ上がみ詣もつで

或ある家いへの息子ひすこさんが、阿父おとつさんの代參だいさんで池上いけがみの本門寺ほんもんじへまゐりまし
 たが、一だい體このひすこ此息子このひすこ殿どの、家うちを出でると遊あそびに耽ふけつて容よう易いに歸かへつた事ことのな
 い代物しろものゆる、阿父おとつさんは出掛でがけに今日けふは信しん心じんの事故じこ出でしてやるが、
 早はやく歸かへらぬと承知しょうちを七しちないぞと脅おどしてはやつたものゝ、爾そん麼なこと位ぐらひ
 は平氣へいきの平左へいざ、相變あひかはらず待まちてとも、戻もどつて來きませんでしたが漸やっと
 翌ある日ひの朝あさ、ヌツクリ歸かへつて來きたので、阿父おとつは、

「池上までは何里ある、何故早く歸らねへのだ」

「早く歸れませんかや、行く先が、お祖師様です」

○武内の大臣は三百年以上生存たと云ふが、そんな人は幾干昔でも

………實に（宿禰——）

○ツイ悪戯をいたしてお泉水の水を濁らまました、誠にハヤ（すみ

ません）

○今度君の家へ米俵を達けてやらふと思ふが表から這入らふか、何うでも（勝手にしろ）

○ヲイ郵便屋さん時に君は幾歳だえ（ハイ辰です）

○鳥名讀込み一行一口話

○君今夜は退屈だが雲雀（芝居）見に行かふ

○お竹さん、今夜は餘り暑いから雀（涼み）に行かふ

○君は竿を擔いで川邊へ行のは何をする、魚を鶴（釣）のさ

○隙子は鴉（硝子）入りに限るね

○提灯行列に行のは白日からかへナーニばん

○齒がよければドン／＼固い物を、水鶏

○割引電車で品川まで二錢五厘は頗る、鷹くない

○爰にお金を落した者は誰だ、驚だく

○花名讀込み一行一口話

○精養軒の西洋料理を喰つたカウソ梅く

○ヲイ君の着て居るのは駱駝織の何だ、海棠だよ

○君のシャツの袖口の止はコハゼか、ナニニ牡丹さ

○雪が春夏秋冬四季絶へぬ日本一の名山は、藤

○茶を飲んで了つた後の汽車中の土瓶はモ一、芙蓉だ

○此お茶碗の形は何だえ、コレかへコリヤ朝顔

○昨夜小僧が裸體にされて掛取の金を盗れたが屹度おひ萩だ

○コレハく何時お歸りで、ハイ昨夜桔梗

○お隣りのおかみさんは今度は四人目かえ、否え後妻

○汝さん火をとるから鳥渡其火鉢をお貸しな、暫しお待ち

○兜改めで師直が惚れた女は無理はない美しい顔よ

○魚名讀込一行一口話

○魚屋の娘がブラく病氣に罹つたが、アリヤ鯉だ

- 泥酔つて寝た跡で呑む水は、よい鮫の水だ
- 生學問矢鱈に人の話へ口を出すのは知つた、鱒
- 春江堂出版の書籍を見ない人に見せてやり、鯛
- 君は此不景氣だのに借りのある家は一軒かえ、否えはうぐ
- 會席で喰ふお料理は、い、鱈だ

○金屬讀込み一行一口話

- 鐵さん君は未だ獨り身かえ、否え女房子のアルミ
- 君の言葉は妙だが何うしたのだ、ナリーニ國の鉛さ

- ナリーさんお前さんのお名は、ハイ錫
- 未だ僕は妻を持たぬので、黄金
- 主人持の身を持つて放蕩するとは實に、プラチナ
- お金は澤山あると云ふ評判だが萬位かえ否え其四分一
- シテ見ると二つの金庫も一は、唐銅
- 左様さイ、顔はして居ても中々苦しい、真鍮
- それも仕方がない鐵さんの身から出た、鏽

一休和尚
曾呂利
蜀山人

頓智嘸

一休の幽靈問答

或時の事であつた、京都紫野大徳寺の和尚或人より一の難問を起さ
れ、

「下から上に下るものは何であるか」

と問はれたには道が大徳寺の老和尚も大に閉口して種々と考へた
るが怎うしても其答が能きないため、それを如何にも残念に思ひと
う／＼それが苦になつて病を惹き起し、憐れ黄泉の客となつたが、

死しても未だ思ひが残つて、死んでも浮ばれず、毎夜／＼、其寺の
住職となつた和尚の枕許に朦朧と姿を現はし、

「下から上へ下るもの何……」

と云つては何處ともなく姿が消え失せるのが常でありました。一休
和尚が大徳寺の後住職となられた其夜も、相變らず、例の幽的が姿
を現はして、相も變らず、

「下から上に下るもの何……」

と言ひましたので、一休和尚は即座に、

「幽魂よ、汝、下から上に下るものが解らぬため浮べぬか。諾。去

らば我れ之を示して浮ばし遣はす。

藤棚の水に寫りし花の影

下より上に下るものかな

と一首の和歌を詠せられたので、先住の幽魂莞爾と笑つてさも安心したと云ふ風で、其まゝツイと姿を搔消し借て其後は絶えて姿を現はしたことはない。

二 曾呂利の蟹拜領

難攻不落と稱へられた大阪城は太閤秀吉地勢を卜し、戰略に鑑み此

地なりせば、五畿七道は言すもがな、日本全國を統御するは此地に如く處なしと、天正十一年十一月を以て、絶大の土木を動かし築城に及ばれたのである。

外觀の宏壯無比なるは勿論、城内の美觀は一口に聚樂の城とさへ稱へし程だ何にせよ秀吉の全盛の極に達した當時である。金銀は砂礫の如くに費やし、其贅をつくしたのであるから到底其立派やかなるは完全な筆舌の形容はできぬのである。

扱ても太閤秀吉斯程の贅をつくしても猶飽足らず、文祿三年三月、豫ねて工事中であつた伏見の城が落成に及んで、此城へ愈々移る事

となつて、开處で轉城の際、種々な物品を伏見新城へ移すことに相なり、其役向の面々は目の廻る程であつたが、爰に一の新問題が生つたのは外でもない。聚樂のお城の庭の泉水の中に、殿下の贅澤心より、金銀を以て造られた數多の蟹が黒木の間や又は、水淺き處へ沈めてあるので、其蟹の背に日光が漣に映じてキラ／＼とする、其眺めの麗はしさを、殿下殊の外御賞美あらせられたが、此度の轉城の際も一此蟹に大分飽きが來て居たので、殿下は轉城祝ひの思召を以て、近く侍べる者共に與へ彼等の喜ぶ顔を見るのも一興と思ひたゞせられ、近習の侍臣一同を御面前にと集められ、

「如何に其方等。泉水に放ち置ける金銀の蟹欲しふは思はぬか」と仰せられるを聞いた侍臣の一同口を揃へて、

「お美事なる貴とき御品、何とて欲くは思はぬ者としては、恐らく一人としてござりませぬ。されども臣等の如き微力なる者共、欲しいと存すればとて及ばぬ儀と諦め罷り居ります」

「左様であるか。然らば其方等の望みを叶へ彼の蟹を得させ遣はさぬものでもないが、蟹は顆多ありと雖限りあり。汝等臣下悉くへ分ち與へ難く、斯く致さふ。倘し予が與へたならば如何致すか、其使途の目的を申せ。其答振り予の心に適せし者に與へ遣はすであら

ふ
と御誕が下つたので、一同の近臣は大喜び各自に腦漿を搾りありた
けの智恵袋から引摺り出した。辯を振つて、思ひく目的を言上
に及んだ。

「愚臣は彼の蟹、幸に拜領の光榮に浴しなば大切に保存し、文鎮と
致せば机上の華ともなり、傍々重寶便利の事と心得まする」

「可し。然らば一個を與へ遣はす」

「ハツ有難き仕合せにござり奉る」

まづ一人の臣下の者が口開けに一個をせしめたので、又た一人が恐

るく膝を進ませ。

「願くば愚臣へも一個の御拜領の光榮を得たく幸に賜りなば、永く

函入と致し大切に保存仕ります」

「罷り成らん。函入となし貯藏致さば、嘸かし蟹は窮命ならん。其

方には遣はさぬぞ」

一人は御不興を蒙つて了つたので、これに懲て容易くは進み出る者

はなかつたが辛と一人恐々進み出て、

「拙者は決して函入なぞに致し貯へ置きは致しませぬ。若し幸ひに

賜はらば、茶釜の蓋の摘みに致したい存念。實は拙者聊か茶道を心

得居りまするで、年來の望み生涯の中に、金の茶釜とまではゆかずとも、切望ては蓋なりともと、豫ねての宿望でござりました」
「可し。其方の額ひ神妙、叶へ遣はす成べく大なるを撰み持ち行け」

「ハツ有難き仕合せに存じまする」

又一人。又一人と進み出で思ひくく其使途目的を言上に及び、或は賜はり或は却けられ十幾個の蟹は、それくく拜領者が決定したが孰れも其申立て平凡にして奇抜な者がないので、殿下も餘り喜び給はぬ御容子。之を見てとつた、平素氣輕な近臣の一人進み出で、

「愚臣は少々各位とは望む處相違ござりまするお許あるや否やは甚だ心許なふござれど、兎にも角にも言上だけは仕ります。世の童謡に、

寝んく猫の尻に、蟹が這ひ込んだ

とか申のがござりまする。火のなき處に煙は立ぬ道理。満更ら所謂なき謠でもござないかと存じ、果して猫の尻へ蟹が這込むものであらふか否やを見たく思へど、今日まで好機會とてござりませぬ。幸ひ殿下より賜はらば、愚臣方の飼猫三毛に一度び試みたく存じまする」

「なか／＼に面白き事を申奴じや。可し二つ三つ遣はす」

と仰せあり殊の外の上機嫌。此時までも一口をも開かず神妙に差控へ居た、新左衛門の姿を殿下御覽せられ、

「其方の慾深きにも似もやらぬ。何とて所望爲さいる。それとも其使途目的の考へとはこれないのか」

斯く殿下よりの御督促を受けぬからぬ顔の新左衛門バツクリ大口開いて、

「欲いの欲しくないのと申す段ではござりませぬ。彼の蟹奴ぞくこの執心。然はござれど、其入用使途の儀、些度大業にござります

ればお聞濟みあるまじきかと、自ら諦め差控へ居りましたる次第。

欲しいには此上もなく所望にござります」

「然程欲しきとあらば言ふて見よ。事柄に因りや叶へ遣はす」

「左様なれば言上仕ります。凡そ英雄豪傑が天下を討ち従へる

を稱して、能く世の人は英雄天下を横行するなぞと申まする而も横

行とは、言ふまでもなく、横に行くといふ意味で、蟹は生れながら

にして、能く岸邊の砂の上を横に歩き申す。然れば彼等蟹の輩は定

めて英雄豪傑であらふと存じます。就ましては此蟹其の力量の程を

試し見んと存じ居るのが豫ねての宿望。さは言ふもの、何が偕て

古來より蟹の戦争や又は蟹の相撲など申すものこれありしを聞かず
 然れば這度御近習の方々拜領に及ぶ、蟹を申受け、或は角力に又は
 蟹合戦など致させなば、定めて與多き事に存じまする。なれ共熟ら
 考へるに、少數の蟹にては、此望みは遂げ難しと自ら斷念致し居れ
 ど凡夫の悲しさ、潔よく諦め難ねて居りましたる處へ、有難き殿下
 の御懇の命を頂戴致したる次第にござります」
 と口から出放題臆面もなく長たらしく喋舌たつるを殿下は呵々と打
 笑ひ、

「有繫は新左、汝の智辯頓才と、其圖太いには毎度ながら感心致す

蟹に合戦又は相撲を取組ませうと存じいかさま、獨り相撲や三匹四
 匹の蟹にては合戦もなるまじ、幾個くと其數を定めんよりは、寧
 ろ泉水に残りある全部を持ちゆけし
 最初から恁くあるべきこと、新左衛門の腹の中で豫知して居た。
 さして考へる容子もなく、
 「ハア這は冥加至極有難き仕合せに存じ奉る」と軽く御禮に及び、
 近臣十幾人で十幾個の蟹を貰つた跡の残りは悉く曾呂利新左衛門の
 手に這入りましたのは、これ全く頓智智才の然らしめたとても云ふ
 のであります。

三 蜀山人の頓智の袈裟

神田須田町の青物問屋に三河屋と云ふ富有があつた。主人の卯兵衛は身代に何不足こそないがたい不足は子のなかつたこれのみ苦しめて居たが、妻のお安が、十幾年振で始めての妊娠。夢ではないかと家内中の大喜び。其中無事に十月を過ぎて安々産み落したのは、玉の様な可愛らしい男の子。福太郎と名を命け掌の中の球と夫婦の老は育て、居る中、福太郎は早くも七歳となつた。卯兵衛夫婦は今までは幸ひに、病一つ生じたこともなく、育て、來たが、猶も此先も

何卒安穩に成長させたいと、丁度十一月十五日七五三のお祝ひであるので、仕度萬端調へ、福太郎は元より供の一同にまで、今日を曠れと着飾らせ、卯兵衛夫婦も共につれたつて、明神へお詣りにと門を出るとたんに、福太郎の足に解つたものがある。福太郎は、

「何か落ちて居るよう」

と言つて何心なく拾ひ上げたのは、一の風呂敷包なので、父の卯兵衛は、

「ドレ何だ——見せな」

と言ひながら件の風呂敷包を受取つて中を開けて見れば、品もあら

ふに、祝ひに行く出先きだと云ふのに、風呂敷包の中なる品は、袈裟一着、珠數一連。卯兵衛は見るから直に顔の色を變へ、

「サア皆な歸んなく。今日のお参りは中止だく」

と一同を引つれて家へ歸つて來たので、妻は夫に對ひ、

「お前さん何故そんなに氣にするのです」

「莫迦！これが氣にせず居られるか。これがお寺詣りにでも出掛ける處なら、まだしもだが、將來を壽く祝ひの神参りに袈裟や珠數を拾つて縁起がい、と言れるかえーア、福は可哀想だ。どうせアノ子は長命はしまる。吁。乃公達夫婦には子供は授つて居ねへのかしらん」

らん

と大層鬱憂ぎこんで了つた。處へ折よく三河屋の店頭を通りかゝつたのが、太田蜀山人目早く見つけた、卯兵衛の舍弟の萬吉。周章て飛んで出て、

「先生く、願ひがムいます。只今兄の卯兵衛が悴の福太郎の七歳の祝ひで、明神にお参りにまゐります途中、これく云々」と袈裟と珠數を拾つた嘸をして、

「何卒兄の心持の恢復ます様何とか巧い先生のお工風を願ひたいもので」

と折入つての頼みに、蜀山人、早速の頓智、傍の硯箱を引寄せ懐紙の皺を伸し、さらりと認め、一首の狂歌、

けさ拾ふころも霜月十五日

この子の年は珠數のかづまで

と祝つて遣りましたので、卯兵衛はこれを見て結ばれた氣は、解れ大層安心をいたし喜びました。果して福太郎は、其後七十幾歳の高齡を保ちました。

四 一休破戒の頓智

一休和尚は其身精淨の體を持ちながら、性來至つて蝟が好物でございまして、或日いと徒然の餘り、小介に吩咐て蝟を購求に遣はしました。生憎其魚屋に蝟がなかつたので、彼の小介は此處よ彼所と探し歩ゐて甚く時が遅れたので、一休和尚最とゞ待わび、

此たびは急ぐと云ふに長袖の

蝟の入道みちのおそさよ

と詠み玉ひて今かくと待かねて居たる所へ漸くのこと、彼の小介は四五はいの蝟を買ひ求めてまゐりました。一休之を見て大に打喜び、直ぐさま料理にとりかゝらふと思ひましたが、否や待て暫し

此蛸このまゝムザく、啖はんこといとい無惨の事である。我れは出家の職分イデヤ引導を渡して呉れん、

手観音蛸手多

斬懸ニ袖酢ニ拜ニ如何

州一味天然別

他禁戒任ニ老釋迦

と斯様な引導が濟みますれば、一休和尚ヤレ引導はすみたるぞ。イデ此上は火葬にせんか將た土葬にせんか。否や、水葬にせんか手取り足取り八本の手に、沐浴させ、袖酢を掛けましてこれは入道坊主の共喰ひ近頃珍らしや甘やと、ムシヤ、食されました。聽て食ひ終つて口を拭ひ、何食はぬ顔して、或る旦那方の許へまゐられ

ました處が、餘り澤山に酒を薦められツイ飲み過し、尾籠にも开處へ小間物屋の店開きをしたのはまだしも、元より蛸は不消化物、先刻喰つた蛸が正でゾロくと出たので、何がさて旦那方を始め家人一同は愕きもし呆れもし、中にも旦那は、不興の顔をして一休和尚に對ひ、

「これは怎うした失態。和尚は日頃、佛の如く精淨の高僧とのみ思つて居りましたが、蛸を啖ふとは、借ても、人は見掛けによらぬもの——和尚も獨且、腥坊主のお仲間でござるな——」
と打ち笑ひ嘲けり罵りましたが、一休和尚一向愕みた容子もなく至

つて平氣で、

「否や、何も我は蝮を食つた覚えはさらになんことである。併し今現に斯く出て見ると爾思はれるのも強ち無理もないが、決して蝮は啖はぬ。喰はぬものは何處までも啖はぬのである——」

と答へたので、旦那は心の中で餘りと言へば白々しい小憎らしい坊主と少しく怒りを帯びた口調で、

「さりとは御坊にも似合はぬ、執拗な暗い辯解なる哉。今現に面のあたり、此如く御坊が吐き出した蝮を、マザ／＼しい、啖ぬとは何事儲て／＼見下げ果て申したり」

と愈々嘲ければ、一休和尚更らに怯びれず、

「卿等は物の道理を辨へぬと云ふもの。假しや只今我が口から蝮が出でたりとするも、決して拙僧が啖はぬと云ふ確かな證據を見せて遣はす程に拙僧と一緒に來れ」

と旦那を始め一同を引つれ、百萬遍の處に行き、善導法然の畫像を見せて、

「アレ／＼見られよ。善導敢て阿彌陀を喰ひしことなきであらふに口より三尊を吐き出されてあるではないか。善導大師でさへ食はぬ物の口より出づるを制し難ければ、況して拙僧の如き者食はざる蝮

の出づるも亦た詮方なきことではないか」
と早速の頓智に、一同は思はず感心して横手を拍て、一休和尚の凡僧にあらざるを知りました。

五 曾呂利の乾袋

一日曾呂利新左衛門茶器の御鑑定の役を勤め大層殿下のお氣に適ひ早速御面前にお召に相なり、御機嫌殊の外麗はしく、
「甚麼に新左よ。今日の殊動予も満足に思ふぞよ。依つて充分なる褒美を與らしたく存するが、怒じ此方で彼これと見計ひて物品を與

らするよりは、何なりと、其方の身分に相應しき物を、其方の器量一杯に望め。必ず叶へてとらするぞ」

新左は此仰せを承り潑と鱒伏し心の中には、今日こそ殿下を愕かし奉らんと、種々勘考いたして居るので、性急の殿下は焦かしく思召して、

「コレよ新左。遠慮に及ばぬ。今日の功は格別である。何なりと望め」

と再度の御諛に、新左衛門やをら頭を擡げ、
「事々しき何の功勞も無之に再度までの有難き御諛を蒙り、新左身

に取り此上の面目はござりませぬ。されば此上何々を望みまするは勿體至極もなき次第。然は去りながら、一物をも望み申さぬ時は却つて殿下の御心に、背き奉るの虞れあり。斯るが故に、聊か望みを申上げ奉りまする。」

と言葉は至つて謙遜。所望は極めて僅少の如くであつたから、殿下は心に幾分か怪みながら、

「決して氣遣ひ無用じや。さるにても平素の慾張にも似もやらず、神妙な心底、聊かと申さず、澤山に望め。」

「然らば、お言葉に甘へ、望みと申すは……。」

「何じやな。」

「願くば二個の大乾袋へ這入りまするだけ、米を頂戴致したく此儀所望にござりまする。」

餘りの小さい様な、新左衛門の所望に、殿下は噴飯たまひ、

「何じや。乾袋に這入るだけの米を呉れと申すのか。さりとは、餘りに不思議千萬、其方の慾張り性にも不似合な、偕ても寡慾の願かな。新左衆人が笑ふぞ。餘り度量が狭いぞ。左様な、吝臭いことを申さず、モツと、大きく望め。」

「尊命有難くはござれど、新左の望みそれにて充分——にござりま

す

「強つての望み好しく聞といけ遣はす。何時にても其方の心任せに、二つでも三つでも構はん。成べく大きな乾袋を持参し、米稟にまゐり、米を詰るだけ入れて参れ」

「速かのお許し謹でお禮を申上げ奉ります。就ては、曾呂利新左衛門の何時、米稟へ参り候も彼これ面倒のごさらぬ様、御役所向衆より、御藏方へお觸れ出し置を願上置まする」

日本六十餘州を掌握し。それにも飽き足らず遠く朝鮮明國へまで手を伸しつゝある大腹中の太閤殿下だ。新左衛門と恁んな僅かばかり

の、約束を結んだ事なぞはいつの間にか、跡方もなく忘れ果て、了つた。處が新左の方では忘れる處ではない殿下を愕かして呉れんと約半ヶ月程は、多人數の袋張りの職人を備入れ、目のまはる程の忙殺さで、漸と出来に及んだのが、二個の乾袋。それはく、其袋の大きい事は、袋の重量ばかりも大の漢子が五六人も掛らなければ持揚げられぬのでも大きさは大抵知れます。偕て其二個の大乾袋をヤツシヨ〜で、御城内へ運ばし、其身は殿下の御前に伺候して、

「今日は愈々、曩つ日、御許を蒙り、拙者に賜はるべき米、二個の乾袋出来仕りましたれば何卒御約束の如く頂戴に推参仕りま

したし

太閤殿下は忘れた記憶を呼び起し、

「爾であつたの、好しく、其二個の袋は定めし持參致したであら

うが、更らに見へぬが、懷中致して居るのか」

會呂利は頭を左右に振り動かし、

「否や、袂や懷中に這入り居る如き、矮小なる乾袋にてはござり

ませぬ。餘程大きうござれば、到底、新左の如き非力の腕肩に乗り

申さぬ因つて拙者の召使人六人餘りの肩に擔かせ、既に其袋はお藏

方へ差廻し置きました」

曩日は、餘りに小さく言はれて愕き、今日は又意外に大袈裟に吹か
けられ、殿下は少しく不審に思召したなれど、たかが袋の事だ何程
の事も仕得るまゝと別段深くは糺さず、

「好しく、甚麼に大きくと、袋は囊であらふ、這入るだけ充分

に詰め込んでまゐれ」

「ハ、有難き仕合せ、然らば頂戴仕りまする」

と御前を辭して、お藏方へ來り藏奉行に面會を求めたので、奉行も

殿下の腰巾着お氣に適りの新左の事故、早速に出迎へ、

「コレハ、會呂利姓、拙者に御用の越き有之わざの御來臨細

苦勞至極に存じまするシテ其御用のお趣きは……」
 と奉行の言葉の尾につき、

「お尋ねに従ひ早速用向の次第申上る、實は先日、拙者事聊か勳功これありしを殿下様殊の外なる御賞美遊ばされ其御褒賞として袋に二つの米穀を賜はりました。就ては今日其賜はりたる米穀頂戴に罷越したる次第、何卒速かに御渡し下さる様……」

と懇懃に申出でられ奉行は不審の眉に皺寄せ、

「偕ても近頃笑止の御咄し、殿下お傍去らずの御身様に似合はしからず、僅に米二袋を御受取りに態々の御來駕とは訝かしく存ずる」

「これは又、怪しかる事を承るもの哉、訝しいとの仰せは、お役向の衆より未だ足下様へ何の御沙汰無之と覚え候。併し拙者、八幡詐言は申さぬ。確に殿下より二つの乾袋に入るだけの米穀頂戴致したのでござるがお役柄念の爲めとありや、何卒急速、殿下様へ御伺ひなされたし」

「否とよ、決して御身様の申さるゝ事、露疑ひ申さぬ。なれど餘りにお望み御輕少ゆへ審しきと申上たるまで、元來僅かばかりの乾袋に二個の米、役向さより何の沙汰とはござらぬが、お身が殿下に二袋を米お乞ひ奉りし噂は耳に致したる事有之、サ、御遠慮なくお

持ち歸りあれ。只今小奴に申付け、俵の口を開かせ申す間、暫時御待ちあれ」

「否々其御手敷には及び申さぬ。拙者の從者數多召連れ参りたればお心遣ひ御無用に願ふ……ソレ頂戴に及べし」

と從者を顧み下知を傳へた、

豫ねて手筈は定められて居たのだ、從者の面々は携へ來つた、件の乾袋を擴ぐるよと見るまに、大阪名代の米庫の中にて、最も大なる倉庫に山の如く米穀の積み込みあるを撰んで屋根の上よりパツサリと、二棟の倉庫に冠せた。最前より、餘りに突飛な馬鹿氣た有様に

藏奉行は呆氣にとられ、暫く茫然と爲すがまゝに黙して眺めて居たが、聽て、

「曾呂利姓、自體斯様な眞似を致し、何をなさるのや、拙者甚麼にも解しかね申す」

「異な事を承はるもの哉、何をなさるとは、自體お奉行のお言葉とも覺えず。只今何とお言やつた。御遠慮なくお持歸りあれと仰せあつたではござらぬか——御言葉に従ひ二袋の米穀持歸るのでおじやるにお答めらしい事を仰せられしは、新左こそ如何にも解し難ね申す」

「成程二袋の米お持ち帰りあれとは申たるに相違ござらぬが、然り
 としてもこれは又た餘りの企み方……此儘拙者一了簡にも罷りならぬ
 事でおじやれば、御迷惑ではござらふが殿下に御伺ひを致すまで、
 暫時お待ち下さる様に……」

「奉行とも言はれる足下の口から、持ち歸れと一旦許して置ながら
 今さらに奇怪なお言葉とは存すれども折角のお頼み……可し相待ち
 申でござる」

散々皮肉を言はれ恩に被せられ、奉行は這々の體で急ぎ登城をなし
 て、殿下に斯々云々と言上に及んだ。

奉行より委細の報告を聽いた太閤殿下、偕ては又しても、曾呂利の奴
 めに、一杯喰はされたかと、道かの太閤も暫く無言で居たが、

「譬へ甚麼に大なりとも、袋は袋なり、約束じや、致し方がない。

新左に袋に這入るだけのものは、悉皆與へても苦うない」

と許可が出たので、奉行は再び急いで立戻り新左に向ひ、

「殿下に御伺ひ申たるに約束じや、袋に這入りしだけは持ち歸れと
 の御上意、サ、御持ち歸りありても、苦うござらぬ」

「爾あるべきは當然の事ではござる、らば頂戴仕る」

と召し伴れ來つた、従者人夫を督し、ドシ〜と遠慮會釋もあらば

こそ、引出すは、引出すは積み込むは、積み込むは、出しも出たり
山と積たる大八車に三百五十幾回と運んだので乾袋のかぶさつたさ
しも大きな米庫二戸前は、米一粒も餘さず空虚となつた。

六 一休五戒問答

當時の智恵者と呼ばれた、蟪川新左衛門が紫野大徳寺に來られ、一
休和尚と佛法のお話をいたされ、和尚は蟪川に對はれ、

「何と新左衛門殿、歎はしい事ではござらぬか、近頃の出家は兎角
に志薄く、昔時は、御佛は五百戒をさへも保ち給へりと聞く、さ

らばせめても、現の僧侶は五戒だけでも保て貰ひたいものである……」

「甚麼にも左様で、兎角破戒の僧の多きは歎はしく存じまする」

「併し世上を廣く見渡し深く察するに、天下にありとしあらゆる物
皆な一として、五戒を保つものはないのである。今手近く此の僅か
尺には足らぬ扇子さへも、五戒を被り居る況して僧侶、生きとし生
けるものとして、五戒を保ち得ぬは道理のことで、亦た是非もない
ことでおやりやる」

「なか／＼に不思議な事を承るもの哉、此の扇子が何とて五戒を
破り居りまするとや、こは又た、例の和尚の輕き出來口にて候はん

「否とよ、輕口にはござない、眞の事にて候」

「然らば拙者、一々扇子の五戒破りの理由一々問ひまゐるべければ和尙聞かしめ給はれ」

「さあらば一々問ひ給へ、答へ申さふ」

「問ひ申さん 如何なるものか、之れ扇子の殺生戒の破戒にて候や」

「答へて曰はん 竹截りて骨とはなさゝるや」

「問ひ申さん 如何なる事か之れ扇子の偷盜戒の破戒にて候や」

「答へて云ふ 虚空の風を偷むを以てなり」

「問ひ申さん 如何なるものか之れ扇子の邪淫戒にて候や」

「答へて云ふ 要と要と合はざるや」

「問ひ申さん 如何なるものか之れ扇子の妄語戒にて候や」

「答へ申さん 畫空事を描くを以てなり」

「問ひ申さん 如何なるものか之れ扇子の飲酒戒の破戒にて候や」

「答へて云ふ 開いてざらんや言ざるや」

と五戒の問答首尾結了して、

「何と新左衛門殿、之れは扇子の五戒を破れるものにてはござらぬ

か」

「之は今に始めぬ御明答、又た一入面白き御答、如何にも感服致し

ました。但し其五戒の中、偷盜戒の御答へに對し、聊か不審申たき
事がござる」

「して其御不審とは如何なる事にて候」

「开は外にてもござらぬ、古語に、

扇是日本扇 風不二日本風

とか申されますが、今此語に據つて考へますれば、扇子はこれ日
本の扇子を動しまして風は日本ばかりでなく、所謂千里同風と申
しますれば、其盜むと申すは、抑も如何なる所以に候か不審と存じ
ます」

と、滑稽半分に詰るを、一休和尚宛然

「新左衛門殿……」

と呼びまするのを、蜷川は、

「ハイ……」

と答へるや否や、一休即座に一首を詠んだ、

春もなく香もなき人の心こそ

呼べば答ふる主もぬす人

と詠まれたので新左衛門大に感じ入つて、

「奇妙即座の御口かな、あはれ願くば先刻よりの始終の間答、一筆

書付けて賜はりたしと請はれましたるに、一休も早速快諾して、一筆走らせ書いて與へたとの事、寔に咳拂ひも珠玉となり輾轉立板をまろぶが如き、頓智即妙如何にも敬服の至りであります。

七 蜀山人と女乞食

蜀山人所用あつて淺草に赴き、觀音堂の裏手を通つてまゐりました。今でこそ公園の裏は千束町だの田町だの立派な町並みになつて居りますが、其當時ときたら、其名の通り一面の田甫で、先生寒風に吹かれながら、頭巾を眞深に被つて震へながら开處を通られると、草

の影に何やら呻る聲が聞へるので、近づいて見ると、一人の女乞食が癩にでも閉ぢられて呟々唸つて居るのでした、先生は直ぐ傍に駈け寄つて、懷中して居た、萬金丹を與へ、其上若干の金を與へて立去られました。其時の狂歌が、

北風は今日はな吹きそいたづらに

虫も被れり薦もかぶれり

救ふべき力なければいたづらに

萬金丹をくれてこそ行け

八 曾呂利と利久の喧嘩

曾呂利新左衛門と、千の利久宗匠とは大の仲悪で恰で犬猿も管ならざる間柄でありました。ある時、利久宗匠の許へ、太閤殿下のお從伴で新左衛門も一緒に呼ばれた、處が利久は、怎うした譯か、殿下に御挨拶を申上げ、其席を退いたまゝ、何時まで待つても再び出て來ないので、新左衛門は、突然と庭に躍り出で折柄の眺めとなつて居た、降つむ白雪を、散々に蹴散らしお庭の風致を滅茶くんに蹂躪して狼藉を極め庭中を荒し廻り、果ては樹々に降りつむ六の花をも

振り落して了つた。

此時漸く主人の利久宗匠出で來り、新左の亂暴を見て、心中酷く怒つたものゝ、道がに下劣者の様にはしたなく怒鳴れもしないので、

人ならば石の上をば行くべきに

雪を踏來る犬にこそあれ

と口吟んで、新左を四つ足に做らへ罵つたが敵手は曾呂利だなかなか閉口する様な男ではない、利久の言葉の終ると直に少の馳みもみせず、

ちん座敷眺め愛する御亭主は

どうせ四足仲間なりけり

とやりかへされ、利久は口惜しく、何か今ま一首と考へつゝ、口を
もがくさせて居る中猶も利久攻撃の狂歌を連發して再た一首、

ちん座敷犬の友達訪ひ來り

雪を蹴立て、遊ぶなりけり

早速の頓智は、利久なぞの遠く曾呂利に及ぶべきでない、太閤殿
下は思召され、甚く感心せられ、利久とても御寵愛の一人何とか此
機を利用して、兩人を和解させんと、思案最中、不圖胸に浮んだ一
首の狂歌、

珍らしや犬と狎とが喧嘩して

猿が仲裁仲を直せよ

と圖場抜けた殿下のお言葉に利久も新左衛門も互ひに我を折り、殿
下の御前に跪いて、爾來兩人共に仲交く水魚の友となりました。

九 蜀山の淺間の狂歌

蜀山人ある年信州善光寺へ御參詣いたされまして、其歸途草津に廻
られ淺間の麓をおまはりになつた。此山は天明三年に山焼がしてか
らかだ間もないことして、彼方此方に焼石焼砂が溜つて居ると云ふ

始未なので、先生は、

「これはまるで火の玉の上を踏んで歩く様なものだ」

と仰有つて歩いて居られました、その時丁度風の工合で噴火の烟が濛々と上から吹き下ろして硫黄の臭ひ匂ひが劇しく鼻を衝めてくるので、普通の人なら鼻を摘んで逃げ出す處を道かは先生どこまでも頓智的の風流、

浅間山なせその様にやきなんす

いはうくがつもりくして

と洒落しました。

幽霊問答一休三寸舌頭に釋迦を弄す

一日或人一休に問ふて申するやうは、或「聞く所に據れば人は死して躰はなくなり果つるとも魂は此の世に留る由でござるが若しも左ることならば假令其躰はなくとも魂だにあらば其人は其儘此の娑婆に残り居て物語りなどもあるべき筈でござる何故なれば人として魂は其本領でござれば此の本領の遣つたる人の物語りなどあるべきは固より其所でござる左るに魂の尋常の物語りなど聞いたことなきは一ツの不思議でござる且つ又一方より考へて見ますると人は地獄或は

極樂へ行いて來世の苦樂があると云ふが若しも魂が行かねば其苦樂も感せぬこととてござらう躰は葬りたる墓地に何時までもあるものにて嘗て地獄極樂へ行いたと云ふ話も聞かぬことである左すれば地獄極樂へ行くと云ふは魂の謂ひで躰の謂ひではござらぬ然らば此の娑婆に魂の留り居る筈もないことである若し猶ほ娑婆に留り居るとしますれば开は魂が二ツなければならぬこととてござる一人の魂が二ツあらう筈もないことである既に一ツとすれば又疑があることとてござる开は亦何故と申すに彼の極樂に行いて佛に成つたる者は其極樂の蓮の臺の快樂が數々多くて此の塵埃の娑婆に來やうなどゝは露毛程も

思はぬことと娑婆歸りなどは全く打ち忘れてしまふこととてござりませう又彼の地獄へ行きし事などは日夜の呵責に魂の骨身は碎かれ手足は疲れ果て中々此の娑婆に來る間隙などはなきこととてござらうに世に幽靈などゝて死したる者の來りて様々の事を言ひ並べて怨する等の事を承るが這は抑も如何なるゆるにや和尚殿の智識で御示し下されと云へば一休之を聞いて申すやうは「左れば其事にて候へ我れ未だ死して見ねば其事は委しくも存じ申さぬこととてござる我等も若き時チト談議など聞きたることの侍るが真か偽か知らぬ魂と云ふものがあつて佛とも成り鬼とも成るげに候が其くせものが閻魔王と

やらんの前にて公事奉行の手に渡り娑婆にて作りし罪を鐵とか銅と
 かの帳とやらんに附けて置き之を午頭馬頭等の獄卒どもの鬼に見せ
 て誰れくは是れくの犯罪であれば急ぎ此の帳簿に由りて呵責せ
 よと云ふ命が下るとか申すことでは是れから赤青等色々の鬼共が之を
 受取りて様々の責めに逢はすのであるさうでがなござる而て其娑婆
 にて犯せし數々の罪ほど之を責ると云のでござるが开は亦何うして
 之を責むるか中々に責め盡されやうとも思はざることである先づ聞
 き給はれよ拙僧此頃一首遣つて除けました其狂歌は斯様でござる
 作り置く罪が須彌ほどあるならば

閻魔の帳に附けどころなし

と斯う作つた狂歌で見れば鬼と云ふ者も實は鈍物である釋迦が一の
 經文は皆な嘘八百をも打越え嘘八萬の皮をもてかためたものでござ
 る而して有るかといふへば無しと説き又無さかといふへば有ると説く實
 に顔憎くの御坊でござる拙僧又一首ござる

釋迦と云ふいたづら者が世に出で、

多くの人を迷するかな

と斯く出来ましてござる如何でござるかといふへば彼の者も亦大いに
 感に入りましたさうでござる如何さま能く悟り開ける問答でござり

ます。

一休終身の一大失敗

抑も一休終身の一大失敗とは何であるか至極たはいもないつまらぬ
ことのやうで至極肝要のことであれば努め忽には爲し給ひぞ或る一
年の事十二月の末つ方偶々東山の吉田となん云はれまする所へ参ら
れましたが开が歸るさに今出川口の河原を過られまするに不圖見れ
ば赤裸なる乞食が伏して居られました一休は一目之を見てヤレ不憫
のものやと思召されまして身に纏へて居る小袖を一重脱いで之を與

へられました去れば一休は心の裡で竊かに思ふやうは彼れ定めて打
ち喜ぶことであらうと想ひましたるに案に相違して彼の乞食は少し
も喜ぶの氣色なく突然ツト手を通されますれば一休乞食に向ツて云
ふやうは「一借ても汝は不思議なる乞食ではないか僅かに一錢だに
貰は難有しとて伏し拜むは乞食の習慣であるに今汝は一重の小袖
少しも嬉しくはないか借てく奇妙な乞食であると申せば彼の乞食
の云ふやう乞御身は我れに小袖を呉れて嬉しくは思はれませぬ
か」と答へますれば一休はハタと手を拍つて云ふ「一借ても我等誤
まりて一大事の悟り茲であるぞや如何さま汝は唯だの乞食にてはよ

もあらし汝一言の教へ我等の愚をしも覺しぬること最とく嬉しきことであるとして目を閉じ掌を合せて霎時伏し拜みて居りましたるに色々姑くにして目を開いて見ますればアラ不思議や彼の乞食は何地へ去りけん跡方も見えす唯だ小袖ばかり跡に残して居りました。

大岡頓智の裁判

八丁堀に住む左官の棟梁で、作藏と云ふ人があつて、おさぬと呼ぶ可愛らしい綺麗な、女の子があつた。ある日浅草の観音へおさぬを伴れて参詣に行つた。其當時のおさぬは、漸く二誕生を済ませた計

り。未だ満三歳にならぬ、チヨコく歩位、ろくくくに、口さへ利く事のできぬのであつた。

父の作藏が、鳥渡油断をした隙に、チヨコくと、おさぬは歩きだして姿が見えなくなつたので、作藏は狂氣の如になつて、开處よ彼處と探し廻つたが、皆くれ姿が見えないので、據なく、泣くく作藏は、家へ戻つて、其事を妻に面目なげに物語ると、泣き喚めいて悲み歎き、それよりは、毎日の様に泣てく目を泣き腫して、病の床に打臥す様になつて、作藏もほとく當惑し、それがため、充分に稼業も手につかぬ様な譯となつたので、悪い時には悪い事の續

くもので、お得意は仲間の者に奪られ、職人には悪い事をする奴が
できる。漸次身代は左り衽になつて、其年の暮、押詰つた師走の二
十八日の夜、おきぬの母は、とう／＼病のため、没死たが、目を冥
り呼吸を引取るまで、

「おきぬ。／＼。」

と口つゞけに言つて、死んで了つた。

偕て作藏は、それやこれやの失費つゞきで負債も澤山にでき、住馴
れた土地にも住難く、家屋も他人に渡して、八丁堀を引拂ひ、暫ら
くは、江戸に居たものゝ、今までは、棟梁よ、親方と、多くの仕手

考を願使ひ、他人から尊敬されて居たのに、瓦落離と變つて、自分
が人に使はれなければならぬ仕義となつて、兎角、面白からぬ事が
多いので、生れ故郷の伊勢の山田へ一先づ引込まふと、決心をいた
し、江戸の土地を、跡にして久し振りで故郷山田へ歸つた。

作藏が山田へ引き移つてから、別段三年計りは何事も變つた事はな
く、従つてお話もありませんでした。

丁度おきぬを迷ひ子にしてから五年目の夏の事でありました。一日
作藏は用達しに、宮川まで行つた、其戻り途、向ふから五十計りの
人相の至つて良くない男が、八つか九歳位の綺麗な、女の子の手を

引ゐてやつて來た。作藏は摺れ違ひさま、何の氣なしに、其子の顔を見るとき、先年觀音參詣の折、迷ひ子にしたおきぬの顔貌に瓜二つなので、潑と思つてよくよく見ると、左の眼尻に、大きい黒子があつた。おきぬも猶且、左の眼尻に大きい黒子があつた事を思ひ出し、猶も漸次考へて見ると其子の着物の模様は慥かに迷ひ子になつた折着て居た、牡丹の花を大きく染出した友禪の模様と同じであつた。いろ／＼の事を考へて見ると、怎うもおきぬではあるまいかと思はれる節が多いので、一丁程行過ぎたのを、跡から追駈る様にして、「モシ／＼、つかぬ事を伺ひますが……」

と呼び止ると、呼び止められた、五十計りの人相の娘くない男は踏止つて、作藏の顔をば見て、

「何だえ、人を呼び止なすつたは。」

「お呼び止めをいたし相濟みませんが、其子は、貴下の眞個のお子さんですか。」

「何だえ……和郎は、此子が眞個の子であらふが、なからふが何も和郎さんの知つた事じやあるまい。」

「爾仰しやられれば、まアそうですが、實は少々、私の方にも氣になる事がございますのでそれで伺つた譯です。」

「何が氣になるか知らないが、そんな御挨拶は、見ず知らずのおまへさんに、私はする筈はない——」

と權もほろ／＼、ズン／＼其女の子の手をひりて行つて了ふと致す、其舉動が怎うも合點のゆかぬので、升處へゆくと、永年、石の上の住ひと云ふ、江戸に居た作藏、そのまゝ先方をやり過ごして置て、密つと跡づけをいたして見ると、宮川の町から一里半程も在になつて居る、窪田と云ふ小さい村へ其怪しい男は、女の子と共に這入つて了ひました。

升處で作藏、いろ／＼手を廻して探つて見ると、其人相の良くない

男と云ふのは、村の中に住つては居る者だが、村の人々から憎まれ毛蟲の様に忌み嫌はれて居る、葉櫻の三吉、云ふ、博徒上りと知れました。开して其女の子は、五年程まへ、三吉が江戸から貰つて來たと云ふ人もあるし、何處からか凌つて來たと云ふ人もある、兎に角、葉櫻の三吉の實子でない事だけは確めた。

葉櫻と云ふ異名は、大層優さしそなた聞えもするが、決して優美や雅致ある意味からつけられた綽名ではない、葉櫻には毛蟲か屹度居る晩春の候、櫻の花が散つて了へば誰も葉櫻の下へ行くのを嫌ふと云ふ處から、誰云ふとなく、三吉の事を葉櫻／＼と言始めた。それ

を、當人の三吉何と思ひ遣つて居るのか、大喜びて當人自らでさへ何か事でもあつて、威張る時には必ず、

「窪田村の葉櫻三吉を知らねへか。」

と啖呵を切るので、今では悪い奴等の社會では、彼葉櫻三吉を知らぬ者なき程の悪漢である。

そんな奴と知れては、到底一筋では充分に、其子の素性を調べさせる氣遣ひはないと、作藏は、お奉行所へ取調べ方を願ひ出た。

當時のお奉行は、大岡公であつたが、まだ其頃は、趣前守と任官をなさらぬ時代で、伊勢の山田の用田奉行大岡忠左衛門と云つたズツ

トお若い時分であつた。

年は若くも、其頃から評判の名奉行であつたが、作藏よりの訴へにより、早速、宮川の在窪田村の村役人へ申遣はし、葉櫻三吉に、其子を伴れて出頭せしめた。

偕て奉行所お白洲には、型の如く、稻妻鞘形のお襖をたて切り正面には、奉行、大岡忠左衛門殿お着座、右方には、目安方と云つて只今なら、差詰め裁判書記の役目、白洲砂利の上には、突匄ひの同心居流れ、何となく神聖らしく嚴かであります。

お調べも順次に片付き、愈々作藏の番になつたので、目安方より同

心に命じたので、作藏、及び相手方葉櫻の三吉は子供を伴れて共に白洲の砂利の上へ座つた。

皮相を悟るとまで人に言れた大岡越前候、早くも相方の人相を見てそれとお察しに相成つたが、型の如く御吟味にかゝつた。

「元、江戸八丁堀岡崎町家持左官棟梁、當時當山田宿、金助同居食客、作藏は其方か。」

「ハイ……………」

「宮川在窪田村住人、馬喰渡世、三吉とは其方か。」

「ハイ……………」

と型の如く双方の身分を問ひ糺しそれから三吉に向ひ、

「三吉……………」

「ハイ……………」

「其方の傍に居る女の子供は、名を何と申す」

「きよと申て居ります。」

「何才に相成る。」

「八才にござります。」

「其方の實子で、其方の妻との間にできたのか。」

「ハイ……………イ、へ……………アノ……………實は私の隠し女に産ましたのでござ

います。」

「兎に角其子は、其方の血統の通つて居る娘じやと申のであるな。」

「左様にござります。それに毛頭違ひはございませぬ。」

「然らば、奉行が問ふまでもなく、可愛ふてく、蚤にも整せる様なことはあるまいの。」

「ハイく、お奉行様の御意の如り、荒い風にさへ厭はせて居る程、可愛がつて居ります。」

「そうあらふく、さて左官棟梁作藏、其方の訴によれば、それなる三吉の娘は、五ヶ年以前、迷ひ子にいたし居たる、おきぬと云へ

る娘じやと申のじやな。」

「ハイく、それに相違ございませぬ。」

「併しよく承はれ。たゞ目尻の黒子のみを證據といたし、三吉は我子なりと、飽まで言張つて居るのを、其方に引渡し憎い。それとも何か他に屈強なる證據人等はあらざるか。」

「他にと仰られると、着物の柄が其當時三つ身に仕立てました切を只今仕立直し其布片の一部分が使用てゐます。」

「コレくそれは慥かな證據には相成らん。同一の布片は幾干も世間にある他には何ぞないか。」

「残念ではございますが他にと仰られますると、作藏たゞ當惑いた
します。」

「ないか。それは困つた。それでは斯くいたさふ、其方は、自分の
子のきぬと言張りきぬじやと申て、一方三吉は我が實子のきよじや
と申張り、奉行も頓と相判らん。」

「それ故開處の處をお捌きを相願ひますので。」

「よし。それならば、手取早く此場で埒のあく裁斷をいたして遣は
す。」

と、同心に吩咐て、おきよじやおきぬじやと双方から言張つて居

る、女の子を、白洲の真中に立せ、作藏三吉の兩人に命じ、左右の
手首を右左から掴ませて置て、

「作藏、三吉の兩人、力のあらん限り根限り其子を引き合ひ引張り

合つて、孰れでも力強く引ずつて己れの傍へ寄せつけ了つた者の子

供と、奉行は裁斷を下す——ソレ引け——双方共に敗るな。とらる

ゝな。」

と奉行はまるで行司の様に、双方を嗾しかけた。列席の人々は、

奇異に感じ世間では名奉行のヤレ智者だと褒めては居るが、こん
な事をする様では、餘り的にはならないと、心中冷笑つて居た人が

多かつた。何しろ災難なのは子供であつた。双方から大の男が力任せに、グイグイ脆弱い腕を引張るのだから痛さに耐へずヒイグと泣く。其中作藏は手を放して、自分から訴を取消てくれと云つた。其云分はこんな事をして、子供を苦める位ならば諦めると云つた。一方の三吉は腕が千切れるまで、勝敗をつけると言つた、大岡公は此兩人の申立て全く作藏の主張が正當と見做されて其子は作藏に下すつた果して後に至り三吉が観音の境内で誘拐した事が知れ三吉は重き處刑になりましたこれらは早速の頓智であります。

一休和尚幼年時代の頓智

一休和尚未だ九歳の折とか、師の坊が秘藏の壺の中に水飴の類ひの甘味のお菓子があつた。師の坊が、ある日外出をする時、一休に其菓子舐められて了ふことを恐れ、師の坊早速の頓智の意志で、一休を傍近く招ぎ、

「コレよ、此壺に這入つて居る物を何と思ふぞ。」

「ハイ、何だが私には存じません。」

「知らなければ教へて置く、これは毒の薬である。一舐め舐めれば

立どころに血を吐て死んで了ふ恐ろしの物であるから、決して傍へ行つても、手を觸れてはなりませんぞ。」

と言渡しますのを、一休は、ハイ〜とさも〜恐れて居る様な振をして居りましたので、これなら、いくら悪戯の一休も手をつける様な事はあるまいと、安心をして、師の御坊は、大徳寺を出られまして、用を済ませ夕刻に及び、歸られて見ると、一休がワイ〜と言つて泣て居る。ア、又何か悪戯をしたワイと、心の中に思ひながら、「何いたしたか。」と言ながらよく〜見れば、悪戯もいたづら自分が虎の子の様に秘藏をして居た、南京古渡の壺が滅茶〜に壊

れ開して中に容れてあつた飾菓子まで、綺麗に舐めつくしてあつた流石の師の御坊も、烈火の様になつて怒憤た。

「コレ〜、一休、あれほど貴様に吩咐て置たのに、何故恁云ふことをいたす。」

「まことに、恁うも申譯のない事をいたしました、それゆへ、私は死んでお詫びをする意志でしたけれど、未だ死ぬことのできないのは、お師匠様、一体全體どう云ふ次第なのでございます。」

叱言をいはれながら、却つて反對に質問をされ、何が何やら薩張譯が判らない師の御坊は、「コレ一休、一体死んで詫をする」と云ふの

もあらし汝一言の教へ我等の愚をしも覺しぬること最とく嬉しき
ことであるとして目を閉じ掌を合せて霎時伏し拜みて居りましたる
に良々姑くにして目を開いて見ますればアラ不思議や彼の乞食は何
地へ去りけん跡方も見えす唯だ小袖ばかり跡に残して居りました。

三遊派落語

痴話喧嘩

エー……一席申上げます下拙は書籍では始めて、御座いますが此
度は御縁があつて初御目見得の事で御座いますから何か面白いもの
と存じますが別に面白いものも御座りませんが何しろ何か餘り連中
の遣らん所のお話を一席申して御機嫌を伺ひませう……何事も縁
と云ふ……縁がなければお目通りの出来るものでは御座いません
下拙も今日これで御目通りするも縁で御座います……何事も此因

縁と申します、尤も此困縁の深いものは親子主従に夫婦で御座います、主従は三世夫婦は二世親子は一世なぞと云ふ事で御座います其の内に此夫婦の縁計りは何うも不思議なもので御座いまして見えず知らずの他人と他人が一所へ寄つて夫婦になるので小い中に、

「彼の人を女房にしやう……」

「彼の人を亭主にしやう……」

と云ふ心は有りませぬ御生長に従て不圖縁が有つて夫婦になるので……東京の人でも御夫婦の縁で有りますから長崎の人と夫婦になる又肥後の熊本の人と甲州の人と夫婦になる夫りや分らんもので御

座います已に斯んなつまらん所の衣物を拵へて着ましても何で御座います表が有つて裏がなければ一枚の着物が出来ませぬ、表が旦那様で裏は細君ですから折目正しく行けば何日でも御夫婦で御座います……是れが遂には旦那が浮氣の染を付けると細君が恪氣の焼穴を明けると着て居られ無いから此裏を取つて外の裏にする是れが再縁で甚だ宜しくない事で御座います……表は縮緬何所で出来たと云ふに縮緬は西京裏は青梅飯野で出来た絹で餘程國は離れて居りますけれども縁で御座いますから夫婦に一つ所へ纏る下着は琉球紬沖繩縣矢張り國は離れて居ります帯は筑前博多羽織は南部で書生羽織

は八丈帽子は獨逸で出来て靴は佛蘭西で西洋合併して居ります其所
 で禪が越中で御座ります……縁と云ふものは不思議なもので其の
 誠に御縁の深い御親密な夫婦がつらまん事から喧嘩致します是りや
 考へて見ますと上等社會御客様のやうな方は夫婦喧嘩は無からうと
 思ひますなせなれば御人品が調のつて居ります……お宅なぞも御
 廣う御座いますから御居間寢間食堂應接間夫りやも……何うも
 殿様と奥様とお居間が違つて居ります我々共はお居間にもお寢間に
 もたつた疊が三疊半か無い二六時中顔と顔見合つて居りますから喧
 嘩をおつぱはじめます、俗に夫婦喧嘩は犬も食はぬと申しますが夜

が夜中でも構は無無い喧嘩始めまして、

「冗談ぢやア無い、お前の様に愚圖く枕元で言つてちや法がつか
 ないぢや無いか……何うしたのだよ……眼くつて仕様が無いぢ
 やア無いか……寝かして呉んねへ……」

「寝かすも寝かさ無いも無い餘りだお前様昨夕何所へ行つたのだへ
 ……」

「何を云ふのだへ……」

「何だ……」

「何を言ふつたつてかを言ふたつて、お前様……お前様昨夕も一

昨日も晩げへも歸ら無いでグウグウ嘸かいて寝るから愚圖く言ふ
べる……」

「嘸かくつて他へ交際で行つて徹夜したのだお前愚圖く言ふ事あ
るめへ……」

「お前様と同志になる時お前様と一緒に東京へ行くけれど、乃公東
京には親類も無いがお前様は東京ものぢやないけれど親戚も親類も
あるだらうけれど私はなんにも無へのだから見捨て無ければと言つ
たら見捨て無いからと云ふから同志になつたのだ」

「見捨てるとも見捨て無いとも言は無いぢや無いか」

「夫れだつてお前様二晩何所へ行つた女つ子の所へ行つたらう女つ
子の方でせぶつて家へ歸つてグウく……嘸かいて寝られぢや心
持ちが悪いから言ふべいちや無いか」

「然んな事ぢや無い、分ら無いな……」

「然んな事ぢや無いつて事あるものか……」

「手前の様な分ら無い奴は無いや……嫌になつて仕舞は……」

「嫌になつて仕舞ふと……」(大聲)

「夜が更けて居る静にしろ……」

「此位ゐは小さいもつと大い聲をするだ……」

「斯ん畜生……」(打つ見得)

「打ちやがつたな……頭叩いたな……」

「分ら無い事云ふから打つたのだ」

「然んな事云ふとおつちんで仕舞ふぞ」

「死んで仕舞ふ……」

「死んで仕舞ふ……死んで仕舞ふと云ふものに死んだためしは無

へや死んで仕舞へ……」

「死んで仕舞へと……首吊るぞ」

「勝手にしろ……」

「身を投げて死んで仕舞ふぞ」

「死んで仕舞へ……」

「オイ……開け無いか……此所を開け無いか……」

「表を叩いて居らあ……何誰でありますか締りがありますから

直ぐと開きますが……大變だ巡査さんだから……大きい聲す

るなと云ふのだ……」

「大分騒しい様だが何事だ……」

「何でも無いのでくだら無い事で……」

「くだら無いと云ふ、事があるか……」

「ヘーッ……今ズー……となんしたので御ざいます……」
 「オイ〜今此前を通ると大聲を發して死んで仕舞ふ方々が死んで仕舞へ〜深更で死ぬとか死ぬとか云ふは穩かならん言葉では無いか……」

「畜生奴大きな聲をするから斯んな事にならあ」

「お前さんから云ふから私が云ふだ……」

「乃公が譯を言つて居るのに……」

「お前様が……」

「オイ〜さうどうも互ひに争つては困るぢや無いか静にしろ……」

……何う云ふ譯で争さうだね……お前方夫婦だね……」

「夫婦で御座います……左様で御座います」

「夫婦ぢやが大分言葉が違ふがお前は東京だが……お前は他縣だね……」

「矢張り此方と一緒にの國です私も東京のものぢや無いのです……」

「お前は寄留でもあるかね……」

「桐生では無いので……」

「國を問ふたのでは無いお前は寄留かと問ふたのだ……」

「然んなもので御座いませう……」

「何んだ……原籍は何所だ……」

「へー……」

「お前の原籍は何所だへ……」

「東京に居ますが源助の所は……」

「分らないなお前の國は何所だへ……」

「私はなんで御座います……下總で御座いまして」

「下總は何所だへ……」(此時手帳へ書留られる見得)

「へー……お書きなさるのは何うか御勘辨を……」

「お前の國を書き取るのだ……」

「夫れを何うか……」

「下總は何所だよ……」

「へー……下總は銚子で御座いまして……」

「銚子は何所だへ……」

「観音前で……」

「名前は何と云ふ……」

「吉田忠助……」

「何才だ……」

「廿五で御座います」

「何商賣だ……」

「職人で御座います……」

「職は何だ……」

「大工で御座います」

「大工か……お前は何所だへ……」

「ヒヤ……」

「お前は何所だへ……」

「私は下總です……」

「下總は銚子か……」

「佐原です……」

「佐原は何所だへ」

「橋本です」

「橋本と云ふ所か……名は何と云ふ……」

「田中鐵と言ひます……」

「何歳だ……」

「二十ですよ……」

「二十歳か……お前は長女か」

「ハ……」

「お前は長女か……」

「夫りやもう宜い……何うでも宜い寝る前に小便はした……」

「お前は長女か姉か兄でもあるか無いかと言ふのだ分ら無い……」

「……」

「長女だよ……」

「女子の是れで様子を見ると夫婦となつて此東京へ出て来たか……」

「……」

「面目ないんで御座います銚子に居りましたが佐原へ仕事に行きまして是れの伯母が心安いから泊つて居りまして仕事に出掛けたので……」

「……何で御座います此奴がチヨイ〜辨當や何か詰めて呉れますから氣の毒だと申ますと此奴の言ふには何うも……氣の毒の事は無いお前さんの辨當をチヨイ〜つめるのが樂みだつて申しますから私ちも萬更でも無いもので御座います……乃公の様なものにでも一緒になつてと言ひましたらお前さんと夫婦になるのは願つたり叶つたりだ……つて……」

「嫌な聲をするな……然……云ふ事なら尙更の事ぢやあ無いか住み慣れた國を出て知らん東京へ来て夫婦になつて居るのぢや中能くしなければならん歸る時は故郷へ飾る錦立派になつて歸らなければ……」

ばならん……夜も更けて居る互ひに大聲を發しては不可お前方大聲を發しては皆此壁一重が他人が住んで居るのだから他のものが迷惑する……眠る事が出来ない明朝の業に差支へるのだ……」

「ま……何うも何うか御勘辨を……」

「お前さん方が大聲を發しては夜更けて居るから誠に困る……此後もある事だが氣を附なさい……」

「あり難う御座います色々御厄介様になまして……」

「是れからなるだけ夫婦喧嘩しないで……」

「色々御厄介に……」

「もう……宜しい……分つたかへ……」

「分りました……」

「分つたら夫れで宜いから戸閉りして寢て仕舞ひなさい……」

「だが私の頭二つ打つて死んで仕舞たつてあんまりぢや無いか何うか片付けて貰ふ……」

「片附け無くとも言ひ私が歸つたら締りを能くして寢て仕舞ひなさい寢て仕舞へば……分ら無い女子だな……」

「お前様寢れば中がなほりますすが中が……」

「なほらん事は無いよ今聞けばお前は佐原で享主は銚子ぢや無いか」

何方も下總と下總だから……根を洗つたらお互ひに千葉縣下（痴話喧嘩）では無いか

芝居道楽

扱てこの凝つては思案に能はずとよく仰しやりますが……中にも碁將棋に凝れば親の最期に會はれんと云ふ位で御座いますお尻の重くなるものだそうで御座いますが何うも其處へ又おへい〜のお對手がお出なさると夫れより食べるものも食べ無いで一晝夜碁を打つて徹夜をしたなぞと云ふ方が有りますとお宅の者もお困りで御座い

ます

「彼の誰だ此處へお茶を入れて持つて来いよ……然うして菓子を持つて来て然うして皆寢て仕舞へよ……私の手で御座いますかウーン……お待ちなさいよ……斯うして置ませう……」

「夫れぢや私は斯うして置ませう……」

と打つて居る處へ女中がお茶を入れて菓子を持つて参りました、

「お茶を入れて参りました……お菓子を是れへ置きました……」

……お茶を持つて参りまして御座いますよ……」

「ハテナ……待つて呉れよ……お茶と来たなあ……是りや

何うも緩い手をしましたな……………」

「イーエ……………温くは御座いませんお湯は沸いて居りますのを注いで参りました……………」

「こすんで…行けば……………」

「濃すぎは致しません只今入れた斗りで……………」

「一つお茶と行きませう……………」

「貴方の様に然うお茶と來られては是れは困つた私もお茶と一つ續いで措きませう」

「へい……………お茶を注いで置きますので御座いますか……………」

「お茶に來られては迷惑千萬だ……………」

「夫れぢや持つて参りませうか……………」

「イヤ……………お茶と迎つて置かう……………」

「何だか困りましたね夫れぢやアお先へ臥せります……………」

「臥せられません……………」

「起きて居るのでござりますか……………徹夜ですか……………」

「……………臥せれ……………」

何を言ふのだが夢中で分りません女は呆れかへつて先きへ寢て仕舞ひますお菓子を手を付けずお茶も冷たくなるが客も」

「私もお茶と行きませう……………」
 「もー……………」一つお茶と……………」
 兩方夢中になつてバチ／＼打つて居りますが然う云ふ鹽梅で御座いますから締も粗漏になりまして泥棒が這入りまして箆管の小袖を一つ脊負脊負つて其所へ出様とする奥の座敷でバチリ／＼……………」と云ふ響目の據る所へ玉でこの泥棒が碁が好きで御座いますか……
 「宜い心持ちだな此寂として居る夜中に……………」樂みだらうな何所の座敷かしらん……………」此方の方かしらん……………」
 と廊下を曲つて、

「障子があかるいが徐と障子を開けて見て遣らう……………」成程合戦最中だウーン……………」白を持つて居るのは主人だな……………」是りや主人の方は少し弱いなけれども客だからお諂に黒を持つて主人に白を持たしたものだなア……………」アレ彼ぢや彼いかない……………」
 と是れも夢中になつて何日か泥棒にはいつたは忘れて障子を開けて碁盤の所へ顔を出しました、
 「其處のところへ夫れは……………」
 「待つてくださいよ助言はなりません……………」助言はなりませんよ……………」ウーン斯うして措きませう……………」

「お茶と矢張りして措きませう……………」

一寸と氣が付いて見ると知ら無い人が碁盤の所へ顔を出して居りま
すから其處は夢中のなかでも、少し可笑と思つたから」

「お前さんは見なれ無いお方だねと遣つて措きませう……………何誰で
御座いますすへト……………」

「へい……………今這入つた泥棒で御座います」

「ハ……………泥棒さんかねと……………お忙しう御座いますか……………」

「誠に閑暇で不可ません……………」

「今夜は何か盗みましたかへ……………」

「へい……………箆笥の小袖を一つ背負……………」

「奥の土藏に金が有るのにつて……………」

「土藏の鍵が知れませんか……………」

「違ひ棚の上にあります……………」

と皆饒舌て仕舞ひましたが夢中になると斯んなものかと思はれま
が茲に芝居好きの小僧が御座いました。

「何や定吉や……………定吉や築地まで此手紙を持つて行くのだ近汝屋
さんへ」

「へい……………只今御飯を預いて参ります……………」

「御飯を食へずに行つて来い……………」

「皆食へました私が私一人跡へ残つたのですから……………」

「又其の口返答するか御飯食へさして遣るのは本當だけれども手前は御飯を食へて行くと芝居へ這入つて来るから今日は御飯は使からは歸つて食へ幾等好きでも芝居見る事は出来ぬ……………何が好きだ何が面白いかと言つて腹が空つて居ては見て居られませへ使ひに急いで行つて来い然うしたら御飯食へさして遣る返事は入ら無いが用は急なのだ早く行つて来い……………」

「へい……………」

表へ出たが小僧、

「ア……………本當に家の旦那程芝居嫌ひな人は無い何時でも彼んな事言つて使に行つて来れば御飯食へさせるなんて腹が空らア……………築地へ行くには新富座の前を通るのだが看板丈でも見て行かう……………忠臣藏か看板見ても宜い心持ちだな……………何時遣つても面白いな……………」

「オイ……………定吉どん一幕見て行か無いか……………」

「オヤ……………吉さん見たいけれども築地へ使に行くのだから……………」

「一幕位の宜いだらう見て行きぬ……………」

「夫れぢやサ見ておくんなさい……」
 と心安い出方が居りますから是れが芝居好き丈に中へ這入りました
 が無錢程安いものは御座いません恰度四段目の幕が今明かうと云ふ
 所で御座います」

「ア………好きな中へ這入つて此繪草紙番附菓子は宜しいかな聞
 いても心持ちが宜いな幕が開かなくつても様子見た斗りでも宜い心
 持ちだなければどもまア腹が空つて來た旦那が仰しやつたとほり腹が
 空つた日には面白いも可笑いも無いが何か食べたいものだな……」
 と小僧が愚痴を滴して居りますと前に乳母さんが居りますがおぶつ

て居る子供が泣き出しましたから、

「坊つちやんお泣きなさいますなよ………今に伯父さんが出て踊り
 ますからね坊つちやんお泣きなさいますなよ………サア〜是れを
 食し上れ………」

と蒲鉾を出す小僧の鼻先へ蒲鉾が出ましたから、

「乃公が取つて食つてやらう是りや甘い蒲鉾だ種が宜いや………も
 つと背中の子供が泣けもつと泣くと云ふと又何か食物が出るだらう
 に泣き止んで仕舞つた泣け〜尻を捻つて遣らう………サア〜泣
 け〜………」

とお尻を捻るから、

「痛いよ……………」

「何が痛いので御座いますよお泣きなさいますなかまとく上げたので御座いますか上つたので御座いますか今度は玉子を召し上れ……………」

「玉子焼が又出た……………旨い〜余程旨いやもつとなけ〜……………」

「オヤ……………又お泣きなさりますか……………もー玉召し上つたのですか……………」

と乳母が振り返り返して見ると呆れ返つた小僧だと思ひましたから今度は

食べられ無いものを遣つて驚ろかして遣らうと丁度烟管を徹したやにだらけな紙燃が御座いましたから其紙燃を、

「坊つちやん是れを召し上れ……………」

「又出た……………此奴は剛氣だ……………」

と惶くつて食ふと脂が一杯付いて居たから、

「アーツ……………アーツ……………大變だアー……………是りや酷い……………」

「何が酷いのだ……………坊ちやんのお尻を捻つたりお泣きなさるぢや無いか」

「只今御馳走様で御座いましたが脂だらけの紙燃には驚きましたか

ら口直しを……………」

「馬鹿な事をお言ひな誰が遣るものが」

「不可ないな……………早く幕が明けば宜い……………」

其の内に幕が明きました四段目一幕で無く五段目六段目七段目と是れを見て歸つゝ参りましたから家へ歸るのが遅くなつたと云ふので大急ぎで歸つて参りました、

「行つて参りました……………」

「行つて参つたぢや無いや大變に築地は遠いなも……………二度も四度も行ける時分だが又芝居へ這人つたな……………」

「見ません……………」

「見ない事があるものか見たに違ひない……………」

「御飯食べます……………」

「待て……………」

「だつてお使に行つて來れば食させるつて……………」

「斯んなに使が遅くなる事はあるまいが芝居見たな見て居る事はなりませんかと言つたが又新富座の忠臣藏は面白いから築地へ行くには彼の芝居は通り道だから又團十郎のおかる……………福助の平右衛門か何か見て居たのだらう……………」

「旦那は芝居を見ないものだから然んな間違つた事を言つて福助の平右衛門に團十郎がおかるになるものが御座いますか……」

「ナニ……今度の忠臣藏乃公だつて行か無い事は無い……確に福助が平右衛門で團十郎はおかるだ……」

「福助のおかるに團十郎の平右衛門です私は確に見て來ましたので御座います……」

「見て來やがつたな今見ないと言つたぢや無いか……」

「アー……現れた御勘辨を……」

「近江屋の御返事は……」

「エー……左様……承知致しました……」

「承知致しました詐を吐け、近江屋へ行かないだらう」

「行つて來ました……」

「懐中から手紙が出て居るが見せろ……」

「現れた……」

「人を馬鹿にして居やがる今日は勘辨しません手紙を先様へ持つて行か無いで芝居を見て居て夫れで御飯食へやうはと推が強い……」

「なりません……」

「何うぞ番頭さん誤つてください……」

「手前が悪いから詫つて乃公が遣る譯にはならない……………」

「番頭さんまで然んな事言つて是れから決して致しませんから……………」

……………」

「番頭此定吉を土藏へ入れて仕舞へ……………」

「御飯を……………」

「土藏へ入れて仕舞へ……………」

「定吉此方へ来い……………」

「番頭さん土藏へ這入るのは宜う御座いますが御飯食べなければ死んで仕舞ひますそんな今日囚人でも御飯食はせない事は有りません……………」

……………」

「然んな理窟を言ふな御飯土藏へ持つて行つて遣るから土藏へ這入つて遊んで居る計りぢやないか時々詫つてお呉んなさい……………」と大きな聲して泣け斯うして手前が好きな役者の繪でも見て鸚鵡石でも読んで居ろ」

「流石は番頭だな褒めおくぞ……………」

「然んな事言ふなへ生意氣で困る泣かなくつちやいかない……………」

「何うぞ詫び言より御飯先きへ……………」

「黙つて居ても乃公も芝居が好きだから今に内密で御飯持て来て遣……………」